

日時 平成21年12月10日（木）9：30～12：00

場所 札幌市中央区北4西7北農健保会館3階大会議室

1 開会

2 挨拶

3 報告事項

- (1) 北海道の外来種リスト改訂方針の一部見直しについて (資料1)
- (2) 北海道の外来種リスト改訂の概要、進捗状況について (資料2、資料2-1～5)

4 検討事項

- (1) 新規掲載種、掲載削除種についての基本的な考え方について (資料3)
- (2) 掲載種のカテゴリー区分についての基本的な考え方について (資料4、資料4-1～2)
- (3) 改訂の進め方等について (資料5)

5 その他

6 閉会

【配付資料】

- 資料1 北海道の外来種リスト改訂方針の一部見直しについて
- 資料2 北海道の外来種リスト改訂の概要、進捗状況について
- 資料2-1 特定外来生物法に基づく特定外来生物等リスト
- 資料2-2 改訂前、改訂後のリストデータ入力表の例について
- 資料2-3 ホームページのコンテンツについて
- 資料2-4 改訂に係る協力者名簿（11月段階）
- 資料2-5 新規掲載や掲載削除等を検討する主な候補種（11月段階）
- 資料3 新規掲載種、掲載削除種についての基本的な考え方について
- 資料4 掲載種のカテゴリー区分についての基本的な考え方について
- 資料4-1 北海道の外来種リスト（北海道ブルーリスト2004）
- 資料4-2 カテゴリー区分Aの細区分（案）について
- 資料5 改訂の進め方等について
- 資料6 北海道外来種対策検討委員会設置要綱・委員名簿

北海道の外来種リスト改訂方針の一部見直しについて

平成21年2月に開催された前回の北海道外来種対策検討委員会で北海道の外来種リスト(北海道ブルーリスト2004)の改訂方針(案)について、道案を説明後、検討を行ったところであるが、検討委員からの意見等を踏まえ、一部見直しを行い、次のとおりの改訂方針とする。

前回改訂方針(案)	左記に対する検討委員の主な意見	今回改訂方針
1 改訂対象種 ○全掲載種 806 種のうち 29 種(A1～A2)を中心に改訂		○予算が措置されたことから 前回掲載種 806 種+新規掲載種、掲載削除種で改訂
2 ペットの取り扱い ○一定の法規制があるため、原則掲載しないが、野外に出た場合に対応を検討	○外来種問題の中でペットが原因のものも多いので対策は必要 ○ペット全部は大がかりなので、何らかの基準を設定した上でデータを載せることも考えられる。	○ <u>ペット</u> についても <u>基準を設定した上で掲載</u> する。 *掲載・削除の基本的な考え方について今回の検討委員会で検討する。
3 カテゴリ区分(A～k)の見直し ①新たな情報により影響が顕著な種等のカテゴリ区分のあてはめを見直す。 ②国内外来種は特定外来生物法の対象外であるため、国外外来種と異なるカテゴリ区分とすべきでは。	②影響論からすると、国内外来種も国外外来種と同じように評価するべきではないか。	①前回改訂方針(案)どおり ② <u>国内国外で、異なるカテゴリ区分とはしない。</u> *カテゴリ区分(A～K)の基本的な考え方について、今回の検討委員会で確認する。
4 カテゴリ A の細区分(A1～A3)の公表 ①影響評価を行いカテゴリ A の細区分(A1～A3)を行い公表する。 (影響項目について充実 (項目のレ点チェック→具体的記述)) ②細区分 A2 から A1 の移行プロセスを説明	①特定の地域ではA1だけど一般の地域ではA3とするより、危険な種の場合、一番シビアなランクA1で規定した方がわかりやすいのでは。 ②モニタリングを充実すべき。全道的に、外来種の情報提供を呼びかけてはどうか。	①前回改訂方針(案)どおり *カテゴリ区分 A1～A3 の細区分等の基本的な考え方について、今回の検討委員会で検討する。 ○ <u>HIPにより道民からの情報収集を実施(A1・A2種)する。</u>
5 改訂実施年度 21 年度 植物以外 22～23 年度 植物		21 年度 全種 *改訂の進め方等について、今回の検討委員会で検討する。

*は、今回検討委員会で確認や検討を行う事項

北海道の外来種リスト改訂の概要、進捗状況について

1 ブルーリスト改訂の概要

(1) 北海道の外来種リスト（北海道ブルーリスト2004）

ア 背景

- ①外来種問題(野生生物が本来の移動能力を超えて、国外又は国内の他地域から人為によって意図的・非意図的に導入された種が地域固有の生態系にとって大きな脅威となっている問題)がクローズアップされてきている。
- ②国において、新たな法整備に向けた検討作業が行われている。
- ③道内でもアライグマやブラックバス等の問題が深刻となっている。

イ 目的

種毎に導入された経緯や生態学的特性、その影響などをとりまとめ、本道における外来種の実態を把握し、対策の基礎資料とする。

ウ 種選定の考え方とカテゴリー区分

次の4つの視点及び生態系などへの影響から種のカテゴリー区分を行い806種を選定した。

- ①本道に導入されているか
- ②本道に定着できるか（越冬の可能性など）
- ③本道に定着しているか。
- ④本道への影響

なお、導入時期は明治時代以降とし、動物は、実験・動物園利用など封じ込め下での導入を除くこととし、ペットは、ペットショップ等の立入調査等において販売が確認された種を検討の対象とした。

植物、農地・林地・園地、家庭菜園、花壇、宅地の庭などで栽培するための導入は、除くこととした。

また、原産地（鳥類の場合繁殖地）が国外である場合は「国外外来種」、国内である場合は「国内外来種」、国外と国内にまたがる場合は「国内外来種」、不明の場合は「不明」と区分した。

(2) 北海道の外来種リスト（北海道ブルーリスト2009改訂版）

ア 背景

- ①平成16年3月に公開した北海道の外来種リスト(北海道ブルーリスト2004)の改訂を5年後に行うこととしていた。
- ②外来生物法における特定外来生物等(資料2-1)の指定、国、道、市町村や民間団体による防除の進展、調査報告等情報が蓄積
- ③効果的な対策が推進されるよう当検討会でカテゴリーAの504種については、平成17～19年度にかけて、種毎に影響評価を行い、対策の優先度からA1～A3に細区分した。

イ 改訂の目的

種毎に導入された経緯や生態学的特性、その影響などの情報を充実させるとともに、カテゴリーAの種は、最新の知見により種毎に影響評価を行い、A1～A3に細区分し、対策の優先順位も示して公表することで、外来種対策の効率的な推進に資することを目的とする。

ウ 前回リストとの主な変更点

【リストの充実】

- ①掲載種追加、削除、種毎のカテゴリー区分の一部見直し
- ②カテゴリー区分Aについて、対策の優先度からA1～A3に細分化し公表
- ③影響の種類をチェックマーク方式から具体的記載に変更

※データ入力表例については資料2-2のとおり

【ホームページの充実】

- ①情報収集・提供システムの導入（A1・A2種の新規分布、イベント情報）
- ②関連情報の提供（関係法令など）

ホームページのコンテンツについては資料2-3のとおり

2 改訂の進捗状況

（1）文献等調査

当検討委員会の検討委員や庁内委員、協力者資料2-4への聞き取り、学術論文、書籍、報告書、インターネット情報、新聞記事、目撃情報、パンフレット、写真などを収集し、データ入力表の作成を進めている。

なお、目撃情報は、誤情報を防ぐため、野帳、記事、添付写真など物理的な根拠が1つ以上存在するものを採用している。

現段階での、新規種、削除種またはカテゴリー区分の変更等を検討する種の主なものは、資料2-5のとおりとなっているが、今後、精査を行う。

（今後、種の追加等の可能性がある。また、今後、種毎にカテゴリーのあてはめを行った際に「本道に定着できない」となった場合など掲載されないこともある。）

（2）ペット情報調査

道内にペットとして持ち込まれている外来種について、以下の方法で調査を行っている。

ア 北海道のタウンページに記載されているペットショップ335店のうち、店舗HP上でペットを販売している18店舗について、インターネット経由で、2009年9月1日～10日の間で検索し、リストアップを行った。

イ 生息地が熱帯のものも含め、132科2,625種が抽出された。（科名・種名が不正確なものもあり。）

特定外来生物法に基づく特定外来生物等（特定、未判定、要注意）リスト

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律に基づき規制される生物のリスト

2005/6/1指定
2006/2/1指定
2006/9/1指定
2007/3/1指定
2008/4/1指定

1. 動物

分類群	目	科	属	特定外来生物	未判定外来生物	種類名証明書の添付が必要な生物
哺乳類 Mammalia	カンガルー目 Marsupialia	オポッサム Didelphidae	ディデルフィス (オポッサム) <i>Didelphis</i> オポッサム科の他の 全属	なし	オポッサム属の全種	オポッサム科及びクスクス科の全種
		クスクス Phalangeridae	フクロギツネ <i>Trichosurus</i> クスクス科の他の全 属	フクロギツネ (<i>T. vulpecula</i>) なし	クスクス科の全種 ただし、次のものを除く。 ・フクロギツネ	
	モグラ目 Insectivora	ハリネズミ Erinaceidae	エリナケウス (ハリネズミ) <i>Erinaceus</i>	ハリネズミ属の全種	なし	ハリネズミ属、アフリカハリネズミ 属、オオミミハリネズミ属、 <i>Mesechinus</i> 属の全種
			アテレリクス (アフリカハリネズミ) <i>Atelerix</i> ヘミエキヌス (オオミミハリネズミ) <i>Hemicchinus</i> メセキヌス <i>Mesechinus</i>	なし	アフリカハリネズミ属全種 オオミミハリネズミ属全種 <i>Mesechinus</i> 属全種 ただし、次のものを除く。 ・ヨツユビハリネズミ <i>A. albiventris</i>	
	霊長目 (サル目) Primates	オナガザル Cercopithecidae	マカカ <i>Macaca</i>	タイワンザル (<i>M. cyclotis</i>) カニクイザル (<i>M. fascicularis</i>) アカゲザル (<i>M. mulatta</i>)	<i>Macaca</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・タイワンザル ・カニクイザル ・アカゲザル ・ニホンザル (<i>M. fuscata</i>)	<i>Macaca</i> 属の全種
	ネズミ目 Rodentia	バカ Agoutidae	バカ科の全属	なし	なし	バカ科、フチア科、バカラナ科、ヌー トリア科の全種
		フチア Capromyidae	フチア科の全属	なし	なし	
		バカラナ Dinomyidae	バカラナ科の全属	なし	なし	
		ヌートリア Myocastoridae	ヌートリア <i>Myocastor</i>	ヌートリア (<i>M. coypus</i>)	なし	
		リス Sciuridae	カルロスキウリス (ハイガシラリス) <i>Callosciurus</i>	クリハラリス(タイワンリス) (<i>C. erythraeus</i>)	ハイガシラリス属の全種 ただし、次のものを除く。 ・クリハラリス(タイワンリス)	
			ブテロミウス <i>Pteromys</i>	タイリクモモンガ (<i>P. volans</i>) ただし、次のものを除く。 ・エゾモモンガ (<i>P. volans orii</i>)	なし	
			スキウリス(リス) <i>Sciurus</i>	トウフバイロリス (<i>S. mandchuricus</i>) キタリス(<i>S. vulgaris</i>) ただし、次のものを除く。 ・エゾリス(<i>S. vulgaris orientis</i>)	リス属の全種 ただし、次のものを除く。 ・トウフバイロリス ・ニホンリス(<i>S. us</i>) ・キタリス(エゾリス)	
			リス科の他の全属	なし	なし	
		ネズミ Muridae	マスカラット <i>Ondatra</i>	マスカラット (<i>O. zibethicus</i>)	なし	マスカラット属の全種
	食肉目 (ネコ目) Carnivora	アライグマ Procyonidae	アライグマ (アライグマ) <i>Procyon</i>	アライグマ (<i>P. lotor</i>) カニクイアライグマ (<i>P. cancrivorus</i>)	なし	アライグマ属の全種
		イタチ Mustelidae	イタチ <i>Mustela</i>	アメリカミンク (<i>M. vison</i>)	イタチ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・オコジョ(<i>M. erminea</i>) ・ニホンイタチ(<i>M. itatsi</i>) ・イイズナ(<i>M. nivalis</i>) ・フェレット(<i>M. putorius furo</i>) ・チョウセンイタチ(<i>M. sibirica</i>) ・アメリカミンク	イタチ属の全種
		マンゲース Herpestidae	エジプトマンゲース <i>Herpestes</i>	ジャワマンゲース (<i>H. javanicus</i>)	マンゲース科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ジャワマンゲース	マンゲース科の全種
			マンゲース科の他の 全属	なし	スリカタ属全種(<i>Suricata</i> 属) ヌーアキヤット(<i>S. suricatta</i>) も含 当	
	偶蹄目 (ウシ目) Artiodactyla	シカ Cervidae	アキシスジカ <i>Axis</i>	アキシスジカ属の全種	なし	アキシスジカ属、シカ属、ダマシカ属 の全種及びシフゾウ
			シカ <i>Cervus</i>	シカ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ホシシユウジカ(<i>C. nippon centralis</i>) ・ケラマジカ(<i>C. nippon keramae</i>) ・マゲシカ(<i>C. nippon mageshimae</i>) ・キウシユウジカ(<i>C. nippon nippon</i>) ・ツシマジカ(<i>C. nippon pulchellus</i>) ・ヤクシカ(<i>C. nippon yakushimae</i>)		
			ダマシカ <i>Dama</i>	ダマシカ属の全種		
			シフゾウ <i>Elaphurus</i>	シフゾウ (<i>E. davidianus</i>)		
			ムンティアクス (ホエジカ) <i>Muntiacus</i>	キョン(<i>M. reevesi</i>)	ホエシカ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・キョン	
鳥綱 Aves	スズメ目 Passeriformes	チメドリ Timaliidae	ガルルラクス (ガビチョウ) <i>Garrulax</i>	ガビチョウ (<i>G. canorus</i>) カオジロガビチョウ (<i>G. sannio</i>) カオクロガビチョウ (<i>G. persimilis</i>)	チメドリ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ガビチョウ ・カオジロガビチョウ ・カオクロガビチョウ	チメドリ科の全種
			レイオドリクス (ソウシチョウ) <i>Leiothrix</i> チメドリ科の他の全 属	ソウシチョウ (<i>L. lutea</i>) なし	ソウシチョウ	

分類群	目	科	属	特定外来生物	未判定外来生物	種類名証明書の添付が必要な生物			
爬虫綱 Reptilia	カメ目 Testudinata	カミツキガメ Chelydridae	ケリユドラ (カミツキガメ) <i>Chelydra</i> カミツキガメ科の他の の全属	カミツキガメ (<i>C. serpentina</i>) なし	なし なし	カミツキガメ科の全種			
	トカゲ亜目 Squamata	タテガミトカゲ (イグアナ) Iguanidae (Polychrotidae)	アナリス (アノール) <i>Anolis</i> ノロプス <i>Norops</i>	アナリス・アングステイテプス (<i>A. angusticeps</i>) グリーンアノール (<i>A. carolinensis</i>) ナイトアノール (<i>A. equestris</i>) カーマンアノール (<i>A. xanmanni</i>) ブラウンアノール (<i>A. sagrei</i>) なし	アノール属及び <i>Norops</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・アナリス・アングステイテプス ・グリーンアノール ・ナイトアノール ・カーマンアノール ・ブラウンアノール	アノール属及び <i>Norops</i> 属の全種			
	ヘビ亜目	ナミヘビ Colubridae	ボイガ (オオガシラ) <i>Boiga</i>	ミドリオオガシラ (<i>B. cyanes</i>) イヌバオオガシラ (<i>B. cynodon</i>) マンクロープヘビ (<i>B. dendrophila</i>) ミナミオオガシラ (<i>B. irregularis</i>) ボウシオオガシラ (<i>B. nigriceps</i>)	オオガシラ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ミドリオオガシラ ・イヌバオオガシラ ・マンクロープヘビ ・ミナミオオガシラ ・ボウシオオガシラ	オオガシラ属及びチャマダラヘビ属 の全種			
			フサモデユナステス (チャマダラヘビ) <i>Psammodynastes</i>	なし	なし				
		クサリヘビ Viperidae	エラフェ (ナメラ) <i>Elaphe</i>	タイワンスジオ (<i>E. taeniura friesi</i>)	スジオナメラ(<i>E. taeniura</i>) ただし、次のものを除く。 ・タイワンスジオ ・サキナメスジオ (<i>E. taeniura schmackeri</i>)	スジオナメラ及びボウシナメラ			
			プロトボトプス (ハブ) <i>Protobothrops</i>	タイワンハブ (<i>P. mucrosquamatus</i>)	ハブ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・タイワンハブ ・サキシマハブ(<i>P. elegans</i>) ・ハブ(<i>P. flaviviridis</i>) ・ヒカラハブ(<i>P. takaransis</i>)	ハブ属及びヤジリハブ属の全種			
			ボトロボス (ヤジリハブ) <i>Bothrops</i>	なし	なし				
	両生綱 Amphibia	無尾目 (カエル目) Anura	ヒキガエル Bufonidae	ブフォ (ヒキガエル) <i>Bufo</i>	ブレーンズヒキガエル (<i>B. cognatus</i>) キンイロヒキガエル (<i>B. guttatus</i>) オオヒキガエル (<i>B. marinus</i>) アカボシヒキガエル (<i>B. punctatus</i>) オークヒキガエル (<i>B. quercicus</i>) テキサスヒキガエル (<i>B. speciosus</i>) コノハヒキガエル (<i>B. typhonius</i>)	ヒキガエル属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ブレーンズヒキガエル ・キンイロヒキガエル ・オオヒキガエル ・アカボシヒキガエル ・オークヒキガエル ・テキサスヒキガエル ・コノハヒキガエル ・ニホンヒキガエル(<i>B. japonicus</i>) ・ミヤコヒキガエル (<i>B. enganizane miyakonis</i>) ・ナガレヒキガエル(<i>B. torrentialis</i>) ・テキサスミドリヒキガエル (<i>B. debilis</i>) ・ロコヒキガエル(<i>B. parsonensis</i>) ・ナンプヒキガエル(<i>B. terrestris</i>) ・ガルフォーストヒキガエル (<i>B. fowleri</i>)	ヒキガエル属の全種(ただし、幼生 についてはカエル目全種)		
					アマガエル Hylidae	ズツキガエル <i>Osteopilus</i>	ズツキガエル属の全種(ただし、幼 生についてはカエル目全種)		
					ユビナガガエル Leptodactylidae	コヤスガエル <i>Eleutherodactylus</i>	コキーコヤスガエル、オンシツガエル (ただし、幼生についてはカエル 目全種)		
アカガエル Ranidae					アカガエル <i>Rana</i>	ウシガエル (<i>R. catesbeiana</i>) ・ブロンズガエル(<i>R. clamitans</i>) ・ブタゴエガエル(<i>R. grylio</i>) ・リバーフロッグ(<i>R. heckscheri</i>) ・フロリダボッグフロッグ(<i>R. okaloosae</i>) ・ミンクフロッグ(<i>R. septentrionalis</i>) ・カーベンターフロッグ(<i>R.</i>	ウシガエル、ブロンズガエル、ブタゴ エガエル、リバーフロッグ、フロリダ ボッグガエル、ミンクフロッグ、カー ベンターフロッグ(ただし、幼生につ いてはカエル目全種)		
アオガエル Rhacophoridae					シロアゴガエル <i>Polypedates</i>	シロアゴガエル (<i>P. leucomystax</i>)	シロアゴガエル属の全種 ただし、次のものを除く。 ・シロアゴガエル	シロアゴガエル属の全種(ただし、幼 生についてはカエル目全種)	
ナマズ Siluriformes					イクタルス <i>Ictalurus</i> アメイルス <i>Ameiurus</i>	チャネルキャットフィッシュ (<i>I. punctatus</i>) なし	<i>Ictalurus</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・チャネルキャットフィッシュ <i>Ameiurus</i> 属の全種	<i>Ictalurus</i> 属及び <i>Ameiurus</i> 属の全種	
バイク Esociformes					バイク Escocidae	バイク(カワカマス) <i>Esoc</i>	ノーザンバイク (<i>E. lucius</i>) マスキーバイク (<i>E. masquinongy</i>)	カワカマス属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ノーザンバイク ・マスキーバイク	カワカマス属の全種
カダヤシ Cyprinodontif ormes					カダヤシ Poeciliidae	ガンブスピア (カダヤシ) <i>Gambusia</i>	カダヤシ (<i>G. affinis</i>)	<i>G. holbrooki</i>	カダヤシ及び <i>G. holbrooki</i>

分類群	目	科	属	特定外来生物	未判定外来生物	種類名証明書の添付が必要な生物	
条鰭亜綱 (魚類) Osteichthyes	スズキ Perciformes (Percoidae)	サンフィッシュ Centrarchidae	レボミス (ブルーギル) <i>Lepomis</i>	ブルーギル (<i>L. macrochirus</i>)	サンフィッシュ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・オオクチバス ・コクチバス ・ブルーギル	サンフィッシュ科、アカメ科及びナンダス科の全種	
			ミクロペテルス (オオクチバス) <i>Micropterus</i>	コクチバス (<i>M. dolomieu</i>) オオクチバス (<i>M. salmoides</i>)			
			サンフィッシュ科の 他の全属 All other genera of Centrarchidae	なし			
			アカメ Centropomidae	アカメ科全属 All genera of Centropomidae	なし		なし
		ナンダス Nandidae	ナンダス科全属 All genera of Nandidae	なし	なし		
		モロネ (狭義) Moronidae	モロネ <i>Morone</i>	ストライプトバス (<i>M. saxatilis</i>) ホワイトバス (<i>M. chrysops</i>)	モロネ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ストライプトバス ・ホワイトバス	モロネ科の全種	
		ベルキクテイス (狭義) Percichthyidae	ガドプシス <i>Gadopsis</i>	なし	<i>Gadopsis</i> 属の全種		
			マクルロケルラ <i>Maccullochella</i>	なし	<i>Maccullochella</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・マレーコッド (<i>M. paeii</i>)	<i>Gadopsis</i> 属、 <i>Maccullochella</i> 属、 <i>Macquaria</i> 属及び <i>Percichthys</i> 属の 全種	
			マククアリア <i>Macquaria</i>	なし	<i>Macquaria</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ゴールデンバーチ (<i>M. ambigua</i>)		
			ベルキクテウス <i>Percichthys</i>	なし	<i>Percichthys</i> 属の全種		
		パーチ Percidae	ギムノセファルス <i>Gymnocephalus</i>	なし	<i>Gymnocephalus</i> 属の全種		
			ベルカ <i>Perca</i>	ヨーロピアンパーチ (<i>P. fluviatilis</i>)	<i>Perca</i> 属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ヨーロピアンパーチ	<i>Gymnocephalus</i> 属、 <i>Perca</i> 属、 <i>Sander</i> 属及び <i>Zingel</i> 属の全種	
			サンデル (サンダー) <i>Sander</i> (<i>Stizostedion</i>)	バイクパーチ (<i>S. lucioperca</i>)	<i>Sander</i> 属全種 ただし、次のものを除く。 ・バイクパーチ		
			ズインゲル <i>Zingel</i>	なし	<i>Zingel</i> 属全種		
		ケツギョ Siniperidae	スニベルカ (ケツギョ) <i>Siniperca</i>	ケツギョ (<i>S. chuatsi</i>) コウライケツギョ (<i>S. scherzeri</i>)	ケツギョ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ケツギョ ・コウライケツギョ	ケツギョ属の全種	
		クモ綱 Arachnid	クモ Araneae	サンリ Scorpiones	キョクトウサンリ Buthidae	キョクトウサンリ科の全属	キョクトウサンリ科の全種
アトラクス <i>Atrax</i>	<i>Atrax</i> 属の全種				なし	なし	<i>Atrax</i> 属及び <i>Hadranyche</i> 属の全種
イトグモ Loxoscelidae	ハドロニウケ <i>Hadranyche</i>			<i>Hadranyche</i> 属の全種	なし	なし	
	ロクソスケレス (イトグモ) <i>Loxosceles</i>			<i>L. reclusa</i> <i>L. laeta</i> <i>L. gaucho</i>	なし	なし	イトグモ属の全種
ヒメグモ Theridiidae	ラトロデクトウス (ゴケグモ) <i>Latreutes</i>			ハイロコケグモ (<i>L. geometricus</i>) セアカゴケグモ (<i>L. hassallii</i>) クロコケグモ (<i>L. mactans</i>) ジュウサンボンゴケグモ (<i>L. tredecimguttatus</i>)	ゴケグモ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・セアカゴケグモ ・ハイロコケグモ ・ジュウサンボンゴケグモ ・クロコケグモ ・アカオビゴケグモ (<i>L. indus</i>)	ゴケグモ属の全種	
	アスタクス <i>Astacus</i>			<i>Astacus</i> 属の全種	なし	なし	
甲殻類 Crustacea	エビ Decapoda	ザリガニ Astacidae	アトラントアスタクス <i>Atlantostacus</i> アウストロボタモビウ ス <i>Austropotamobius</i> カスピアスタクス <i>Caspiastacus</i> パキファスタクス <i>Pacifastacus</i>	ウチダザリガニ／タンカイザリガ ニ (シグナルクレイフィッシュ) (<i>P. leniusculus</i>)	ザリガニ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ <i>Astacus</i> 属全種 ・ウチダザリガニ／タンカイザリガ ニ	なし	ザリガニ科、アメリカザリガニ科、ミ ナミザリガニ科の全種
			オルコネクテス <i>Orconectes</i>	ラスティークレイフィッシュ (<i>O. rusticus</i>)	アメリカザリガニ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ラスティークレイフィッシュ ・ニホンザリガニ (<i>Cambaroides japonicus</i>) ・アメリカザリガニ (<i>Procambarus clarkii</i>)	なし	
		アメリカザリガニ Cambaridae	なし	なし	なし		
		ミナミザリガニ Parastacidae	ケラクス <i>Cherax</i> ミナミザリガニ科の 他の全属	<i>Cherax</i> 属の全種 なし	ミナミザリガニ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ <i>Cherax</i> 属の全種	なし	
		モクスガニ Varunidae	エリオケイル (モクスガニ) <i>Eriocheir</i>	モクスガニ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・モクスガニ (<i>E. japonica</i>)	なし	モクスガニ属の全種	

分類群	目	科	属	特定外来生物	未判定外来生物	種類名証明書の添付が必要な生物		
昆虫綱 Insecta	コウチュウ Coleoptera	コガネムシ Scarabaeidae	ケイトヌス (テナガコガネ) <i>Cheilotorus</i>	テナガコガネ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・ヤンバルテナガコガネ(<i>C. jamber</i>)	なし	ムネアカセンチュウコガネ科、マンマルコガネ科、ホソマグソクワガタ科、センチュウコガネ科、ヒゲトハナムグリ科、ニセコブスジコガネ科、アツバネコガネ科、クワガタムシ科、アカマダラセンチュウコガネ科、クロツヤムシ科、フユセンチュウコガネ科、コガネムシ科、コブスジコガネ科の全種		
			エウキルス (クモテナガコガネ) <i>Euchirus</i>	クモテナガコガネ属の全種	なし			
			プロボマクルス (ヒメテナガコガネ) <i>Propomacrus</i>	ヒメテナガコガネ属の全種	なし			
	ハチ Hymenoptera	ミツバチ Apidae	ボンブス (マルハナバチ) <i>Bombus</i>	セイヨウオオマルハナバチ (<i>B. terrestris</i>)	マルハナバチ属の全種 ただし、次のものを除く。 ・コマルハナバチ ・エゾコマルハナバチ ・ツシマコマルハナバチ ・ヒメマルハナバチ ・アイヌヒメマルハナバチ ・シコタンヒメマルハナバチ ・ナガマルハナバチ ・ハイロマルハナバチ ・ホシシユウハイロマルハナバチ ・トラマルハナバチ ・エゾトラマルハナバチ ・ノサップマルハナバチ ・ミヤママルハナバチ ・エゾミヤママルハナバチ ・アカマルハナバチ ・オオマルハナバチ ・エゾオオマルハナバチ ・クロマルハナバチ ・チシママルハナバチ ・ニセハイロマルハナバチ ・シムレンクマルハナバチ ・ウルップシュレンクマルハナバチ ・ウナシリシュレンクマルハナバチ ・セイヨウオオマルハナバチ ・ウスリーマルハナバチ ・エゾナガマルハナバチ	マルハナバチ属の全種		
					ソレノプシス (トフシアリ) <i>Solenopsis</i>	ヒアリ (<i>S. invicta</i>) アカカミアリ (<i>S. geminata</i>)	なし	ヒアリ アカカミアリ
					リネピテマ (アルゼンチンアリ) <i>Linepithema</i>	アルゼンチンアリ (<i>L. humile</i>)	なし	アルゼンチンアリ
					ワンスマニア <i>Wasmannia</i>	コカミアリ (<i>W. auropunctata</i>)	なし	コカミアリ
		アリ Formicidae						
軟体動物門 Mollusca	イガイ Mytiloida	イガイ Mytilidae	リムノベルナ (カワヒバリガイ) <i>Limnoperna</i>	カワヒバリガイ属の全種	なし	カワヒバリガイ属の全種		
	マルスダレガイ Veneroida	カワホトギス Dreissenidae	ドレイセナ <i>Dreissena</i>	クワツガガイ (<i>D. bugensis</i>) カワホトギスガイ (<i>D. polymorpha</i>)	なし	クワツガガイ カワホトギスガイ		
	マイマイ Stylommatophora	Haplotrematidae	アンコトレマ <i>Ancotrema</i> ハプロトレマ <i>Haplotrema</i>	なし	Haplotrematidae科の全種			
		Oleacinidae	Oleacinidae科の全	なし	Oleacinidae科の全種			
		スリツヤマイマイ Rhytididae	スリツヤマイマイ科 全属	なし	スリツヤマイマイ科の全種			
		Spiraxidae	エウグランディナ <i>Euglandina</i> Spiraxidae科の他の 全属	ヤマヒタチオビ(オカヒタチオビ) (<i>E. rosea</i>) なし	Spiraxidae科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ヤマヒタチオビ			
		ネジレガイ (タワラガイ) Streptaxidae	ネジレガイ(タワラガイ)科全属	なし	ネジレガイ科の全種 ただし、次のものを除く。 ・ <i>Sinoennea</i> 属全種 ・ソメフケダワラガイ (<i>Indoennea bicolor</i>)			
		オカチョウジガイ (オカクチキレガイ) Subulinidae	オカチョウジガイ(オカクチキレガイ)科の全属	なし	オカチョウジガイ科の全属 ただし、次のものを除く。 ・マルオカチョウジガイ (<i>Allopeas brevispirum</i>) ・オカチョウジガイ (<i>A. clavulinum kyotoense</i>) ・オオオカチョウジガイ (<i>A. gracilis</i>) ・ユウドウオカチョウジガイ (<i>A. heudei</i>) ・トクサオカチョウジガイ (<i>A. javanicum</i>) ・シリプトオカチョウジガイ (<i>A. mauritanium obespira</i>) ・ホソオカチョウジガイ (<i>A. pyrgula</i>) ・サツマオカチョウジガイ (<i>A. satsumense</i>) ・オオクビキレガイ (<i>Rumina decollata</i>) ・オカクチキレガイ (<i>Subulina octona</i>)	Haplotrematidae科、Oleacinidae科、スリツヤマイマイ科、Spiraxidae科、ネジレガイ科、オカチョウジガイ科の全種		
扁形動物門 Platyhelminthes	三岐腸 Tricladida	ヤリガタリクウス ムシ Rhyncodermidae	ブラテュテムス <i>Platydemus</i>	ニューギニアヤリガタリクウス ムシ (<i>P. manokwari</i>)	なし	ニューギニアヤリガタリクウスムシ		

分類群	目	科	属	特定外来生物	未判定外来生物	種類名証明書の添付が必要な生物	
2. 植物							
維管束植物 Tracheophyte	合弁花類 Sympetalae	キク Compositae	コレオプスイズ (ハルシャギク) <i>Coreopsis</i>	オオキンケイギク※ (<i>C. lanceolata</i>)	なし	ハルシャギク属の全種	
			ギムノコロニス (ミズヒマワリ) <i>Gymnocoronis</i>	ミズヒマワリ (<i>G. spilanthes</i>)	なし	ミズヒマワリ属の全種	
			ルドベキア (オオハシゴソウ) <i>Rudbeckia</i>	オオハシゴソウ※ (<i>R. laciniata</i>)	なし	オオハシゴソウ属の全種	
			セネキオ (キオン(サワギク)) <i>Senecio</i>	ナルトサワギク (<i>S. madagascariensis</i>)	なし	キオン属の全種	
			ゴマノハグサ Scrophulariaceae	ヴェロニカ (クワガタソウ) <i>Veronica</i>	オオカワヂシャ※ (<i>V. anagallis-aquatica</i>)	なし	クワガタソウ属の全種
	離弁花類 Caryophyllales	ヒユ Amaranthaceae	アルテルナンテラ (ツルノゲイトウ) <i>Aklernanthera</i>	サガエツルノゲイトウ (<i>A. phloxeroides</i>)	なし	ツルノゲイトウ属の全種	
			セリ Apiaceae	ヒュウシキトドメグサ (チドメグサ) <i>Hydrocotyle</i>	<i>H. bonariensis</i> <i>H. umbellata</i>	チドメグサ属の全種	
			ウリ Cucurbitaceae	スイキュオス (アレチウリ) <i>Sicyos</i>	アレチウリ (<i>S. angulatus</i>)	なし	アレチウリ属の全種
			アリノトウグサ Haloragaceae	ミウロフユルム (フサモ) <i>Myriophyllum</i>	オオフサモ (<i>M. aquaticum</i>)	なし	フサモ属の全種
			単子葉植物 Liliopsida	イネ Poaceae	スバルディナ <i>Spartina</i>	スバルディナ・アングリカ (<i>S. anglica</i>)	なし
	サトイモ Araceae	ピステイア (ボタンウキクサ) <i>Pistia</i>		ボタンウキクサ (<i>P. stratiotes</i>)	なし	ボタンウキクサ	
	シダ植物 Pteridophyta	アゾラ (アカウキクサ) <i>Azolla</i>		アゾラ・クリスタータ (<i>A. cristata</i>)	なし	アカウキクサ属の全種	

※切花は除く

要注意外来生物リスト(哺乳類・鳥類)

○被害に係る一定の知見はあり、引き続き指定の適否について検討する外来生物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	概要
インドクジャク	<i>Pavo cristatus</i>	生態系(競合・駆逐)	沖縄で捕食等による被害が発生しており、駆除が進められているが、沖縄以外では定着・繁殖のおそれが高い。被害が沖縄地域に限定的である一方で、国内の学校・公園、観光施設等で多数が飼育されていることから、沖縄諸島、八重山諸島等で積極的な防除を検討・推進する必要がある。適切な管理の実施が重要であり、特に沖縄などでは、本種のこれ以上の導入、移動を控え、飼育施設や飼育方法に留意し、逸出等がないよう十分注意して管理すべきである。

○被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	概要
リスザル	<i>Salimix sciureus</i>	生態系(競合・駆逐)	伊豆半島で野外で個体が高頻度で確認されるなど目撃例は多いが、生態系に対する影響については不明な点が多い。飼育者は飼育施設からの逸出を防ぐ必要がある。
フェレット	<i>Mustela furo</i>	生態系(競合・駆逐、捕食)	海外では、野生化した個体による鳥類の卵・雛などの捕食が報告されており、愛玩飼養を禁止している国もある。我が国への輸入個体は、ほとんどが去勢・不妊、異種交配手術が施されている。去勢、不妊を確実に実施している個体を飼育するよう配慮すべきであり、飼養に当たっては、野外への逸失、逸出等がないよう十分注意して管理すべきである。
シマリス	<i>Tamias sibiricus</i>	生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)	エゾマリスとの交雑が懸念されているが、交雑のおそれに関する知見が不足している。大量にペットとして利用されており、定着すれば在来生物相に影響を与える可能性があるので、飼養に当たっては、野外への逸失、逸出等がないよう十分注意すべきである。特に北海道ではエゾマリスとの交雑が懸念されるために、特に注意する必要がある。
シジュウカラガンガン大型亜種	<i>Branta canadensis moffiti</i>	生態系(遺伝的攪乱)	ニュージランド、ヨーロッパに導入されているオオカナダガン(<i>Branta canadensis moffiti</i>)である可能性の高い、別亜種が定着しており、在来亜種との交雑の可能性がある。在来の亜種に対する影響を考慮し、これ以上放鳥すべきでない。
コリンウスラ	<i>Colinus virginianus</i>	生態系(捕食)	原産地のアメリカでは森林から草原まで、様々な環境に生息しており、日本でも一部の地域で定着しているが、生態系への具体的影響については不明な点が多い。逸出すれば再捕獲も困難であるので、新たな飼育は慎重に対応すべきである。
クロエリセイタカシギ	<i>Himantopus himantopus mexicanus</i>	生態系(遺伝的攪乱)	我が国に人為的に放鳥された個体群が定着しており、絶滅危惧ⅠB類(EN)となっている在来のセイタカシギ亜種との交雑による遺伝的攪乱の影響は大きいと懸念されるが、定着の実態や影響の程度に関する知見は不足している。本亜種は動物園等で飼育されている個体数も多いので、逸出が起きないように飼育者は注意すべきである。
シリアカヒヨドリ	<i>Pycnonotus cafer</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	海外で農林業への被害が報告されているが、本種が国内で影響を及ぼすおそれとその程度の評価に当たっては、更なる情報の集積が必要である。ペット目的などで海外で飼育には十分注意すべきである。世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
外国産メジロ (ハイバラメジロ、ヒメメジロなど)**	<i>Zosterops palpebrosus</i> , <i>Z. japonicus simplex</i> など	生態系(遺伝的攪乱、競合・駆逐)	野生化すれば、近縁種および亜種間で交雑が起こり、遺伝的攪乱を招く可能性が高いと思われるが、交雑の事例が確認されていない。逸出種になることにより、似た資源を利用する在来種への影響が懸念される。外国産及び在来種のメジロについては、鳥獣保護法により輸入や飼養が規制されている。

** *Z. japonicus* の亜種、ヒメメジロ(*Z. japonicus simplex*)、ハイナンメジロ(*Z. j. hainanus*)、キウチメジロ(*Z. j. batensis*)、フィリピンメジロ(*Z. j. meyeri*)を含む。
在来メジロ(*Z. j. japonicus*、*Z. j. sturnigeri*、*Z. j. alani*、*Z. j. insularis*、*Z. j. lochoensis*、*Z. j. daioensis*)は除く

要注意外來生物以下爬蟲類・兩生類

被害に係る一定の知見はあり、引き続き指定の適否について検討する外来生物	種々	立寄道で増殖されている影響の肉食
-------------------------------------	----	------------------

ミシシッピアカミミガメ	和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	摘要
		<i>Trachemys scripta elegans</i>	水生系(鱉合・黿・捕食)	繁殖地が減少しているが、農業や選出による個体野外へ広く定着しており、在来種への影響がある可能性がある。天敵に飼育されており限制により代替となるカメ類の輸入が増大する可能性や、大量に運送される可能性などが考えられ、今後の被害知見の集積とともに、運送のリスク評価や飼育に関するマナーの向上が特に必要である。
				販売、飼育におたつては、長生きすることや大きなことを十分理解し、飼いが責任を持つ飼育することを確認する必要がある。日本の侵略的外来種ワースト100(ULIGN)、世界の侵略的外来種ワースト100(ULIGN)。

の被害に及ぶる知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

[illegible]

要 注意外来生物リスト 魚類

○被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物

和名	学名	生態系に属する一定の知見はあり、引き続き指定の調査について検討する影響生物	文獻等で指摘されている影響の内容
リョウタイクワバラナゴ	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>		生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)
ニジマス	<i>Oncorhynchus mykiss</i>		生態系(捕食、競合・駆逐)
ブラウントラウト	<i>Salmo trutta</i>		生態系(捕食、競合・駆逐)
カラマズ	<i>Salvelinus fontinalis</i>		生態系(捕食、競合・駆逐、遺伝的攪乱)
グッピー	<i>Poecilia reticulata</i>		生態系(競合・駆逐)

○被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

和名		学名	文献等に掲載されている影響の内容	概要
○被害に係る知見が不足しており、引き続く情報収集等が必要である				
ソウギョ		<i>Ctenopharyngodon idellus</i>	生態系(競合・駆逐)	食用目的で導入され、最近では釣りや水草除去のために湖や沼に放流されているが、繁殖が可能な水域は広大な下流域を有する利根川水系等に限定されるため、これ以上の分布拡大の可能性は低い。ただし、通刺に放流された水等では、在来植物群落を破壊させる事例もあり、安易な放流を行わないよう注意が必要。日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
アオウオ		<i>Mylopharyngodon piceus</i>	生態系(競合・駆逐)	食用目的で導入され、いくつかの水系で生息が確認されているが、繁殖が可能な水域は広大な下流域を有する利根川水系等に限定されるため、これ以上の分布拡大の可能性は低い。ただし、生態系に影響を与えることは適切な管理を行なうことが重要。
オオナナゴ		<i>Acheilognathus macropterus</i>	生態系(競合・駆逐)	近年、霞ヶ浦を含む利根川水系で定着・急増し、在来のタナゴ類を駆逐しているおそれ指摘されているが、被害の実態は不明。早急に知見の集積に努めるとともに、これ以上の分布拡大の可能性があることによる、適切な管理を行なうことが重要。
カラダジョウ		<i>paramisgurnus dabryanus</i>	生態系(競合・駆逐)	少なくとも17県で生息が確認されており、在来のドジョウと競合する可能性が指摘されているが、被害の実態は不明である。食用として輸入されるドジョウに混入した可能性も指摘されており、不意な遺棄や逸出がないよう適切な管理が必要。
ヨーロッパナマズ		<i>Silurus glanis</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	観賞用として利用されているが、野外で定着した場合には生態系に影響を与える可能性があり、定着した場合に生態系に影響を与える可能性が指摘されている。飼育係業者や利用者によって管理が行なうことが重要。
ウオオキングギヤット フィッシュ		<i>Clarias batrachus</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	観賞用として利用されているが、野外で定着した場合には生態系に影響を与える可能性があり、定着した場合に生態系に影響を与える可能性が指摘されている。飼育係業者や利用者によって管理が行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島等のみである。世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
マダラロリカリ		<i>Liposarcus disjunctivus</i>	生態系(競合・駆逐)	観賞用として利用されているが、野外で定着した場合には生態系に影響を与える可能性があり、定着した場合に生態系に影響を与える可能性が指摘されている。飼育係業者や利用者によって管理が行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島等のみである。
ナイルハナチ		<i>Lates niloticus</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	食用や観賞用として利用されているが、飼養場所からの逸出により生態系に影響を与える可能性があり、定着の可能性が指摘されている。飼育係業者や利用者によって管理が行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島等のみである。世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
タイリクスズキ		<i>Lateolabrax sp.</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	海産で小刺しげを便して養殖されているが、飼養場所から大量に逸出した場合は、一時的に在来種等と過度な競争関係が生じる可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。
マーレーコード		<i>Maccullochella peelii</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	温帯域に生息し、繁殖力が旺盛な肉食性淡水魚であり、捕食等により在来生物相に影響をおよぼすおそれがあり、適切な管理を行なうことが重要。観賞魚として利用されているが、IUCNのレッドリストに絶滅のおそれのある種として掲載されており、学術的な目的等を除いて輸入を慎むべきとの指摘がある。
ゴールデンパーチ		<i>Macquaria ambigua</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	温帯域に生息し、繁殖力が旺盛な肉食性淡水魚であり、捕食等により在来生物相に影響をおよぼすおそれがあり、適切な管理を行なうことが重要。観賞魚として利用されているが、IUCNのレッドリストに絶滅のおそれのある種として掲載されており、学術的な目的等を除いて輸入を慎むべきとの指摘がある。
ナイルティライピア		<i>Oreochromis niloticus</i>	生態系(競合・駆逐)	食用として利用されているが、飼養場所からの逸出により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島や温泉地等のみである。
カワスズメ		<i>Oreochromis mossambicus</i>	生態系(競合・駆逐)	食用として利用されているが、飼養場所からの逸出により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島や温泉地等のみである。世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
カムルチー		<i>Channa argus</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	全国各地に定着し、霞ヶ浦等では一時的に急増したが、現在は安定網に入り、目立った被害は確認されていない。ただし、釣魚として利用されており、飼養場所からの逸出、不意な放流等により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、今後とも適切な管理を行なうことが重要。
タイワンジョウ		<i>Channa maculata</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	西日本を中心に定着しているが、目立った被害は確認されていない。ただし、釣魚として利用されており、飼養場所からの逸出、不意な放流等により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、今後とも適切な管理を行なうことが重要。
コウタイ		<i>Channa asiatica</i>	生態系(捕食、競合・駆逐)	飼養場所からの逸出、不意に持ち出し放流等を行うことにより、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。

要注意外来生物リスト 昆虫類等陸生節足動物

○被害に係る知見が不足しており、引き継ぎ情報の集積に努める外来生物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	概要
クワガタムシ科	Lucanidae	生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)	大量の個体が密玩用に輸入・販売され、一般家庭にも浸透しており、低年齢層の飼育者も多い。野外での逸出個体の発見があり、遺伝的攪乱も懸念されるが、実証的データは不足している。野外で確認される個体は遺棄が主である可能性が高く、飼育に関するマナーの向上が特に重要であり、安易な飼育・購入等による遺棄が生じないよう販売に係る事業者等を中心に、適正な飼育に関する普及啓蒙を飼育者に対し積極的に進めていく必要がある。
サカイシロテンハナムグリ	<i>Protaetia orientalis sakaii</i>	生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)	在来種との交雑については、確からしい証拠が発見されたばかりで、より詳細な検討が必要。沖縄島の平地では在来種をしのぐ優占種となっており、競合による影響が懸念される。国内への侵入および各島への伝播は樹木の導入により、土中の幼虫が持ちこまれた可能性が高く、土の移動に注意が必要である。
チャイロネツタイスズバチ	<i>Delta pyriforme</i>	生態系(競合・駆逐・捕食)	大型の捕食者で小笠原で普通種となっており、在来の昆虫(特にチョウ目)への影響が懸念されるが、実態は不明。小笠原の周辺島嶼に分布が拡大しないよう監視できる体制を構築することが望ましい。
ナンヨウチビアンナガバチ	<i>Ropalinda marginata</i>	生態系(競合・駆逐・捕食)	硫黄島では普通種で、捕食による在来昆虫への影響が懸念されるが、実態は不明。小笠原に侵入しないよう監視できる体制を構築することが望ましい。被害に係る知見の充実と硫黄島における防除手法の検討が望まれる。
アフリカミツバチとその交雑個体群(アフリカ化ミツバチ)	<i>Apis mellifera scutellata</i>	生態系(競合・駆逐)、人の生命・身体に係る被害	海外において、本亜種とヨーロッパ系ミツバチとの交雑個体(アフリカ化ミツバチ)が高い攻撃性を持つことが知られているが、日本における被害のおそれは不明。本亜種の養蜂目的での輸入はないと考えられるが、今後とも予防的観点からもアフリカ産の8亜種のうち本亜種又は本亜種の交雑個体の安易な輸入がなされないよう注意が必要。

○選定の対象とならないが、注意喚起が必要な外来生物(放蝶行為の対象)

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	概要
ホソオチヨウ	<i>Sericois montela</i>	生態系(競合)	ジャコアアゲハとの競合が懸念されている。放蝶に由来すると考えられる分布拡大が危れる。植物防疫法に基づく検疫有害動物として輸入が禁止されている種であり、国内で意図的に放蝶して野外への定着を試みる行為は、被害の予防の観点からも、厳に慎むべきである。
アカボシゴマダラ	<i>Hestina assimilis</i> (在来 <i>H. a. shirakii</i> を除く)	生態系(競合)	ゴマダラチヨウとの競合が懸念されている。 <i>Hestina assimilis shirakii</i> が奄美大島に在来で分布するが、特産川原などで分布を拡大中の種は国外産の亜種である。植物防疫法に基づく検疫有害動物として輸入が禁止されている種であり、国内で意図的に放蝶して野外への定着を試みる行為は、被害の予防の観点からも、厳に慎むべきである。

要注意外来生物リスト 無脊椎動物(陸生節足動物を除く)

○被害に係る一定の知見はあり、引き続き指定の適否について検討する外来生物

和名	学名	生息域	導入経路 導入手段	文獻等で指摘されている影 響の内容	摘要
アメリカザリガニ	<i>Procambarus clarkii</i>	淡水産	意図的 食用・増養殖	生態系(総合・駆逐・捕食、 環境攪乱など)	特に希少な水草や水生昆虫への影響が懸念されるが、既に蔓延している地域が多く、また、ペットとしての飼養も極めて多いため、適正な執行体制の確保や効果的な防除が困難である。
ムラサキイガイ	<i>Mytilus galloprovincialis</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合・駆逐・遺伝的 攪乱)、農林水産業	既に広範囲に分布しており、内湾生態系を一変させてきた。養殖貝類・取水施設等への付着により多大の被害を与えている。在来種との交雑が発見されており、遺伝子汚染が懸念される。防除は困難であるが、大量発生時の汚染被害等に注意が必要。一部で養殖が行われている。日本の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。世界の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。
ミドリイガイ	<i>Perna viridis</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合・駆逐・遺伝的 攪乱、環境攪乱)、農林水産業	養殖貝類・取水施設等への付着により多大の被害を与えている。既に広範囲に分布しており、非意図的に拡散するため、規制による効果は少ないと考えられる。大量発生時の汚染被害等に注意が必要。
カサネカンザシ	<i>Hydroides elegans</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合・駆逐・環境攪 乱)、農林水産業	養殖カサネの殻表面に付着し養殖業に多大な被害を与えたほか、取水施設への汚染被害を引き起こしている。被害に係る知見は多いが、既に広範囲に分布しており、駆除、防除が難しい。大量発生時には汚染被害等に注意が必要。日本の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。

○被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

和名	学名	生息域	導入経路 導入手段	文獻等で指摘されている影 響の内容	摘要
タゲジマフジツボ	<i>Balanus amphitrite</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合・駆逐)	在来種と競合し、減少させた可能性がある。国内での被害の知見は明確でないが、ハラスト水等の適切な管理に注意が必要。
デチュウカイミドリガニ	<i>Carcinus aestuarii</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(捕食)	在来種との競合の可能性はある。国内での被害の知見は明確でないが、既に分布を拡大中の外来生物であり、ハラスト水等の管理などにて分布拡大を防ぐことが必要。日本の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。
ヨーロッパミドリガニ	<i>Carcinus maenas</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(捕食)、 農林水産業	国内では未定着であるが、諸外国では水産業への被害や在来生物への捕食など多大な被害を与えている。世界の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。
カラムシロ	<i>Nassarius sinarus</i>	海産	非意図的 水産物への混入	生態系(総合)、農林水産業	有明海においてハゼ漁などに多大な被害を与えている。水産資源(アマガキなど)の輸入の際に混入するので、水産資源の輸入の際には注意が必要。
コウロンエカワヒバリガイ	<i>Xenostrobus securis</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合)、農林水産業	既に広範囲に分布しており、防除は困難であるが、大量発生時の汚染被害等に注意が必要。日本の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。
イガイダマシ	<i>Mytilopsis sallei</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合・駆逐・環境攪 乱)	インドでは船舶・取水施設への汚染被害を与えている。日本でも分布を広げており、在来付着生物との競合が懸念されている。国内での被害の知見は明確でないが、今後はハラスト水等の適切な管理に注意が必要。
タイワンジジミ種群	<i>Corbicula fluminea</i>	淡水産	意図的 食用・畜養	生態系 (総合・駆逐・遺伝的攪乱)	アメリカの河川で大繁殖し、取水施設の通水障害や在来二枚貝の生息を圧迫する等の被害を引き起こしている。国内での被害の知見は明確でないが、日本各地で分布を拡大中の外来生物であり、さらに輸入ジジミには、カワヒバリガイ等の生態系に被害を及ぼす他の淡水産外来生物が混入して外来生物の移入経路になっていることから、輸入ジジミの取り扱いについては、混入を回避するよう利用関係者による十分な注意が必要である。
シナハマグリ	<i>Meretrix petechialis</i>	海産	非意図的 食用・畜養	生態系(遺伝的攪乱)	国内での被害の知見は明確でないが、蓄養・放流時には拡散防止の注意が必要。日本の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。
カニヤドリカンザシ	<i>Ficopomatus enigmaticus</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(総合・駆逐・環境攪 乱)、農林水産業	ヨーロッパでは取水障害などの被害を与えている。国内での被害の知見は明確でないが、ハラスト水等の適切な管理に注意が必要。
ムササビアワフスロイ (注)ムササビアワフスロイ種	<i>Mnemiopsis leidyi</i>	海産	非意図的 ハラスト水等	生態系(捕食・総合)	黒海では、捕食によりプランクトンの群集構造に影響を及ぼし、プランクトン食の魚類の減少を引き起こした。ハラスト水の適切な管理に注意が必要。世界の侵略的外来種ファースト100(IUCN)。

○選定の対象とならないが、注意喚起が必要な外来生物

和名	学名	生息域	導入経路 導入手段	文獻等で指摘されている影 響の内容	摘要
アフリカマイマイ	<i>Achatina fulica</i>	陸産	意図的 食用	生態系(総合・駆逐・環境攪 乱)、農林水産業	食害により、在来植物や農作物に被害を与えるおそれがあり、南西諸島や小笠原に定着している。植物防疫法により輸入や分布域からの持ち出しが規制されており、これらの遵守が必要である。
スクミリンゴガイ	<i>Pomacea canaliculata</i>	淡水産	意図的 食用	生態系(総合・駆逐・環境攪 乱)、農林水産業	食害により、在来の水草や農作物に被害を与えるおそれがあり、関東以南に広蔓延している。植物防疫法により輸入が規制されており、これらの遵守が必要であるとともに、国内でも未定着の地域に放すことのないよう注意すべきである。

要注外来生物リスト 植物

○被害に係る一定の短見はあり、引き継ぎ指定の道否について検討する外来生物

導入・利用の形態		学名	和名	文獻等で指摘されている影響の内容	摘要
意 図 的 導 入	水草	オオカナダモ	<i>Egeria densa</i>	生態系(総合・駆逐、環境攪乱)、農林水産業	各地の湖沼に侵入し、クロモ等の在来水生植物と競合し駆逐している。 ・大量に利用されているため規制による大量遺棄のおそれがある。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなつた場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 ・在来種との競合・駆逐等のおそれがあるため、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
		コカナダモ	<i>Elodea nuttallii</i>	生態系(総合・駆逐、環境攪乱)	各地の湖沼に侵入し、クロモ等の在来水生植物と競合し駆逐している。 ・輸入、流通、販売が行われていないので、規制による効果は小さい。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
		ホテイアオイ	<i>Eichhornia crassipes</i>	生態系(総合・駆逐、環境攪乱)、農林水産業	既に各地の湖沼等に野生化している浮遊性の水草で、水面を覆い尽くし光を遮ることによって在来水生植物の生存を脅かすとともに、アレロパシー作用等を通じて水生生物全体へ影響をおそれがある。 ・大畧に利用されているため規制による大量遺棄のおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなつた場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 ・在来種との競合・駆逐等のおそれがあるため、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。
		セイタカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i>	生態系(総合・駆逐、環境攪乱)	日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。 ・現在では輸入、流通、販売が行われておらず、規制による効果は小さい。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 ・既に各地の河川敷や荒地等で野生化しているが、希少種等との競合・駆逐のおそれが高い地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
非 意 図 的 導 入	埋入等	オオバクサ	<i>Ambrosia trifida</i>	生態系(総合・駆逐、環境攪乱)	日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。 ・意図的導入が行われていないので、規制による効果は小さい。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 ・既に各地の河川敷や荒地等で野生化しているが、希少種等との競合・駆逐のおそれが高い地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。

○被害に係る知見が不足しており、引き継ぎ情報の集積に努める外来生物

導入・利用の形態		和名	学名	文獻等で指摘されている影響の内容	摘要
水草	オオサンショウモ		<i>Salvinia molesta</i>	生態系(競合・駆逐・運送、運送的攪乱)、農林水産業	- 一部の地域で野生化がみられることから、絶滅危惧種のサンショウモとの競合・駆逐や、運送的攪乱のおそれがある。 - 觀賞用の水草として利用されているので、今後分布が拡大するおそれがある。 - 海外では、水田雑草となったり、養魚場の害草になっている。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。
	ハゴロモモ		<i>Cabomba caroliniana</i>	生態系(競合・駆逐)	- 本州以南の各地で野生化しており、場所によっては大群集をつくるので、在来水草と競合・駆逐のおそれがある。 - 金魚藻の名で親しまれ、大量に利用されていることから、今後分布が拡大するおそれがある。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。
	アメリカミズユキシタ		<i>Ludwigia repens</i>	生態系(競合・駆逐)	- 天然記念物の深泥池で増加しており、在来種との競合・駆逐のおそれがある。 - 觀賞用の水草として利用されているので、今後分布が拡大するおそれがある。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。
	オトメアゼナ		<i>Bacopa monnieri</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	- 海外では水田や水路の雑草となっており、日本に侵入すれば在来の水草と競合するおそれがある。 - 文豪で育成が容易な水草として觀賞用に販売されているので、定着する可能性がある。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。
	ハナガガブタ		<i>Nymphoides aquatica</i>	生態系(競合・駆逐)	- 一部の地域で野生化がみられることから、近縁の絶滅危惧種との競合・駆逐や、運送的攪乱のおそれがある。 - 觀賞用の水草として利用されているので、今後分布が拡大するおそれがある。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。
	ナガバオモダカ		<i>Sagittaria graminea</i>	生態系(競合・駆逐)	- 天然記念物の深泥池での大繁殖が確認された他、各地で野生化しており、在来水草との競合・駆逐のおそれがある。 - 觀賞用の水草として利用されているので、今後分布が拡大するおそれがある。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。
	キシヨウブ		<i>Iris pseudacorus</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	- 繁殖力が強く、海外では水路等の雑草になっており、日本でも水辺の在来種と競合・駆逐のおそれがある。 - 近縁種に絶滅危惧種が含まれ、それらの運送的攪乱のおそれがある。 - 美しい花が親しまれ、觀賞用に栽培されることが多いため、分布が拡大するおそれがある。 - 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 - 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ還棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 - ピオニーブ創出等を目的とした水草の利用には、在来種を利用することが望まれる。 - 日本の侵略的外来種フースト100(IUCN)。

意図的導入

陸生	チョウセンアサガ オ属	<i>Datura sp.</i>	農林水産業、人の生命又は身体	・園芸品種を含む様々な種類が販売、栽培されているが、毒性を持つことへの認知が低く、誤食による中毒事例が発生している。 ・植物体全体に有毒成分を含み、中毒事例も多数あるので、誤って食べることのないよう、注意が必要である。
	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・花が美しいので観賞用に植えられていることがある。
	ネバリノギク	<i>Aster novae-angliae</i>	生態系(競合・駆逐)	・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種のひとつとされている。
	タチアワユキセン ダンゴサ	<i>Bidens pilosa</i> var. <i>radiata</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	ハルジオン	<i>Erigeron philadelphicus</i>	生態系(競合・駆逐、環境攪乱)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	オオアブダチソウ	<i>Solidago gigantea</i> var. <i>leptophylla</i>	生態系(競合・駆逐)	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	ヒメジョオン	<i>Stenactis annuus</i>	生態系(競合・駆逐、環境攪乱)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	ノハナカカラウサ	<i>Tradescantia fluminensis</i>	生態系(競合・駆逐)	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	キクイモ	<i>Helianthus tuberosus</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	外来タンポポが種群	<i>Taraxacum</i> spp.	生態系(競合・駆逐、環境攪乱、遺伝的攪乱)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
	オランダダガラシ	<i>Nasturtium officinale</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
				・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
				・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。
				・繁殖力が強く、畑地では雑草防除の難草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UON)。

意図的導入

種名等	学名	生態系(組合・駆逐・駆逐)	生息系(組合・駆逐・駆逐)	侵入等
ハリビユ	<i>Amaranthus spinosus</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・鋭い棘を持つ一年生草本で、牧草地や飼料畑に侵入して家畜への有害植物になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
イチヂ	<i>Abutilon theophrasti</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・畑作物や牧草と競合するとともに、飼料に混入すると牛乳が異常な風味になる。また、表皮が丈夫な繊維質で容易に切れない植物なので、作物に混入すると収穫の妨げになるなど、被害種とされている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UICN)。
エノギシギシ	<i>Rumex obtusifolius</i> var. <i>agrestis</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来植物への競合・駆逐のおそれがあるため、駆除が実施されている。 ・農耕地の雑草として防除が行われている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・既に各地で野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
ハルザキヤマガラシ	<i>Barbarea vulgaris</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境等にも侵入し、在来植物への競合・駆逐のおそれがあるため、駆除が実施されている。 ・農耕地の雑草であり、近年も分布を拡大している。 ・非意図的導入については、侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・既に各地で定着しており、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある場合には、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UICN)。
ドウニンジン	<i>Conium maculatum</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・有毒成分を含み、牧草地の周辺に生育することから、牛等の家畜に有害な植物である。 ・植物体全体に有毒成分を含むので、牧草地や草食動物に影響を及ぼすおそれのある場所では、積極的な防除または分布拡大の抑制が望まれる。
メマツヨイグサ	<i>Oenothera biennis</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・亜高山帯や砂丘等にも侵入し、在来種との競合のおそれがあるとして問題になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
コマツヨイグサ	<i>Oenothera lachnata</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・河川敷や砂丘に侵入するため、そうした環境に特異的な在来植物への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
フルナスビ	<i>Solanum carolinense</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・鋭い棘を持つ多年生草本で、牧草地や飼料畑に侵入して家畜への有害植物になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
ヤセウツボ	<i>Orobancha minor</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・多様な植物に寄生するので、在来種や牧草の生育を抑制するおそれがある。 ・現在も分布を拡大しつつある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
ヘラオハコ	<i>Plantago lanceolata</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・繁殖力が強く、河川敷や農耕地等に侵入するため、在来種や農作物への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
アメリカネンジグサ	<i>Quiscuta pentagona</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・多様な植物に寄生するので、在来種や農作物の生育を抑制するおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
セイヨウヒルガオ	<i>Convolvulus arvensis</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・繁殖力が強く、農耕地では雑草として問題になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
オオツバムグラ	<i>Diodia teres</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・鳥砂丘を始め、近年も各地で分布を拡大しており、林縁等にも侵入することから、在来種との競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
アメリカオニアザミ	<i>Cirsium vulgare</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・自然性の高い環境や牧草地に侵入するため、在来種や牧草と競合・駆逐のおそれがある。 ・鋭い棘を持つ植物なので、家畜や草食動物の有害植物となっている。・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
カミツレモトキ	<i>Anthemis cotula</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・畑地や牧草地に大発生し、乳牛が採食すると牛乳に異臭がつくため、問題になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
ブタクサ	<i>Ambrosia elatior</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・河川敷や牧草地等の他に、亜高山等の自然性の高い場所に侵入するため、在来種や農作物との競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
ブタナ	<i>Hypochaeris glabra</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・河川敷や牧草地等に侵入するため、河川に固有な在来種や牧草への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
オオオナモミ	<i>Xanthium canadense</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・河川敷や牧草地等に侵入するため、河川に固有な在来種や牧草への競合・駆逐のおそれがある。 ・牧草地に侵入すると家畜に有毒であり、綿毛の付着による羊毛の品質低下も問題になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UICN)。
アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・河川敷や水辺の在来植物への競合・駆逐のおそれがあるとともに、代替的な水田雑草の一つである。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
コセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> var. <i>palosa</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	農林水産業	・河川敷等に生育する在来植物や農作物への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i>	生態系(組合・駆逐・駆逐)	水産業	・競争力が強く(雑草耐性型)であるため、畑地・農耕地・牧草地に蔓延し、在来種にみられる雑草になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・日本の侵略的外来種ワースト100(UICN)。

非意図的導入

非意図的導入

一部の地域で定着	ヒメムカンヨモギ	<i>Eriogon canadensis</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 河川敷等に侵入するので、河川の国有の在来種との競合・駆逐のおそれがある。 - 競争力が強い(根の繁殖力)があるため、畑地、牧草地に普通にみられる雑草になっている。 - 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
	メリケンカルカヤ	<i>Andropogon virginicus</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 各地で近年になって増え加がみられるため、在来種や農作物との競合・駆逐のおそれがある。 - 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
	メリケンガヤツリ	<i>Cyperus eragrostis</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 繁殖力が強く(水辺を中心に)分布を拡大しているため、在来の海洋植物との競合・駆逐のおそれがある。 - 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
	シウクヨウガヤツリ	<i>Cyperus esculentus</i>	農林水産業	- 増えによる繁殖力が旺盛な多年生草本で、牧草地や飼料畑に侵入して雑草の被害になっている。 - 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
	ハリエニシダ	<i>Ulex europaeus</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 鋭く長い棘があるため、牧草地等に侵入すると家畜に有害で防除しにくい植物である。 - 既に各地で野生化しているが、分布拡大のおそれがある場合には、防除の検討が望まれる。
	ランタナ	<i>Lantana camara</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 日本では、小笠原や沖縄等で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。
	ヒマワリヒヨドリ	<i>Chromolaena odorata</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 日本では、沖縄で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。
	テリハハバ・ジロウ	<i>Peidium cattleianum</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 日本では、小笠原で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。
	サンショウモドキ	<i>Schinus terebinthifolius</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 日本では、小笠原で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。
	アメリカハママグルマ	<i>Sphagneticola trilobata</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 日本では、沖縄で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。
	モリシマアカシア	<i>Acacia mearnsii</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	セイロンマンリョウ	<i>Ardisia elliptica</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	ヤツデグワ	<i>Cecropia peltata</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	キバチンクシヤ	<i>Hedyotium gardnerianum</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
導入あり	オオバノボタン	<i>Miconia calvescens</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	カエンボク	<i>Spathodea campanulata</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	アカキナノキ	<i>Cinchona pubescens</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	アメリカクサノボタ	<i>Oleandra hirta</i>	生態系(総合・駆逐)、農林水産業	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	タマリクス・ラモシシマ	<i>Tamarix ramosissima</i>	生態系(総合・駆逐)	- 国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 - 栽培に当たっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。

未導入	リグストルム・ロブ ストゥム	<i>Ligustrum robustum</i>	生態系(競合・駆逐)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	カユブチ	<i>Melaleuca quinquevneria</i>	生態系(競合・駆逐)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	ミカニア・ミクラン サ	<i>Mikania micrantha</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	ミモザ・ビグラ	<i>Mimosa pigra</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	モレラ・フアヤ	<i>Morella faya</i>	生態系(競合・駆逐)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	オープンディア・スト リクダ	<i>Opuntia stricta</i>	生態系(競合・駆逐)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	フランスカイガン シヨウ	<i>Pinus pinaster</i>	生態系(競合・駆逐)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	フロンス・グラン ドウロサ	<i>Prosopis glandulosa</i>	生態系(競合・駆逐、環境腐乱)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。
	キミ/ヒマラヤキイ チゴ	<i>Rubus ellipticus</i>	生態系(競合・駆逐)	国際自然保護連合(IUCN)の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。

○別添総合的な検討を進める緑化植物

導入・利用の形態	和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	概要
緑化等 意図的導入	イタチハギ	<i>Amorpha fruticosa</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)	自然性の高い地域への導入がみられることから、そうした地域での法面緑化にはより影響の少ない種類を利用できるか検討する等の配慮が必要である。また、在来系土壌と誤解されている場合もあるので、外来種であることを理解した上で注意して利用する必要がある。
	ギンネム	<i>Leucaena leucocephala</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)	緑化などのために沖縄や小笠原諸島に導入された。しかし、固有性の高い小笠原の島嶼生態系において、植物群集の構造を改変するなどの影響は大きく、未定着の地域に持ち込まないなどの配慮が必要である。
	ハリエンジュ	<i>Robinia pseudoacacia</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)	砂防林や薪炭材として導入され、品質の堅固な植物としても広く利用されている。しかし、各地の河川や海岸などでは繁茂し、希少植物を含む在来植物を駆逐するおそれがある。影響の大きい場所では積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。
	トウネズミモチ	<i>Ligustrum lucidum</i>	生態系(競合・駆逐)	移植が容易で生長が速く、大気汚染に強いことなどから、街路樹や公園樹等として広く利用されている。しかし、訪花昆虫や果実食の鳥類への誘引力が強く、多数の種子が鳥により散布されて容易に分布を拡大する。そのため、都市近郊の二次林の種組成や河川敷の植生に影響を及ぼすおそれがある。利用に当たっては鳥による種子散布を考慮に入れ、地域によっては適切な代替物の検討が望まれる。
	ハイイロモミギ	<i>Artemisia sieversiana</i>	生態系(競合・駆逐)	緑化に用いられる外国産の樹種モミギに含まれる他、観賞用キクの接ぎ木台として導入された。在来種の遺伝的攪乱のおそれがあるため、逸出を防ぐための管理と、当該地域産の在来種または別種への転換の可能性について総合的に検討することが望まれる。
	シナダレスズメギヤ	<i>Eragrostis curvula</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)	耐暑性と耐旱性に優れ、土壌侵食防止力が強い。法面緑化などに全国で用いられている。しかし、河川に侵入して砂を堆積するなどのため、在来植物との競合・駆逐や、生育環境の改変が生じている場合がある。種子が河川に流入しないための適切な管理の可能性と、既に侵入したもののについての防除の必要性や防除技術の検討、さらには適切な代替物の利用の可能性を検討することが望まれる。
	オニウシノグサ	<i>Festuca arundinacea</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	永続性や土壌保全能力が高く、環境への適応性も高いことなどから、牧草や緑化植物として全国で広く用いられているが、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっていることがある。逸出によるこうした問題が起こらないよう適切な管理を行うとともに、自然環境にも配慮した品種の利用の可能性を検討することが望まれる。
	カモガヤ	<i>Dactylis glomerata</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	耐陰性などの様々な環境適性を持つため、牧草や緑化植物として全国で広く用いられているが、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、問題になっている。こうした場所では逸出による問題が起こらないよう適切な管理を行うとともに、自然環境にも配慮した品種または他の種類の利用の可能性を検討することが望まれる。
	シバムギ	<i>Elymus repens</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)、農林水産業	耐塩性があり冷涼な環境に適した牧草として、寒冷地に導入された。しかし地域によっては逸出して雑防除の雑草となり、在来植物との競合のおそれも生じている。適切な代替物の利用と分布拡大の抑制の可能性の検討が望まれる。
	ネズミムギ・ボンムギ	<i>Lolium multiflorum</i> ・ <i>L. perenne</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	環境への適応性が強く牧草や緑化植物として全国で広く用いられている。しかし、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっている場合がある。逸出によるこうした問題が起こらないよう適切な管理を行うとともに、より影響の少ない品種の有無の検討や他の種類の利用可能性の検討が望まれる。
	キシュウスズメバエ	<i>Paspalum distichum</i> var. <i>distichum</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)、農林水産業	耐塩性や耐塩性があるため、溜田や水田転換畑での飼料として利用が試みられたが、水田や水路で雑草化し、湿地の在来植物との競合のおそれが生じている。適切な代替物の利用と、分布拡大の抑制の可能性の検討が望まれる。
	オオアワガエリ	<i>Pheum pratense</i>	生態系(競合・駆逐・環境攪乱)、農林水産業	冷涼な環境に適した牧草として、寒冷地で広く用いられているが、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっていることがある。こうした場所では、牧草地からの逸出が起こらないような適切な管理を行うとともに、より影響の少ない品種や他の牧草の利用の可能性を検討することが望まれる。

新規BL項目の例(HPのレイアウトとは異なる)

2004BL(現状)

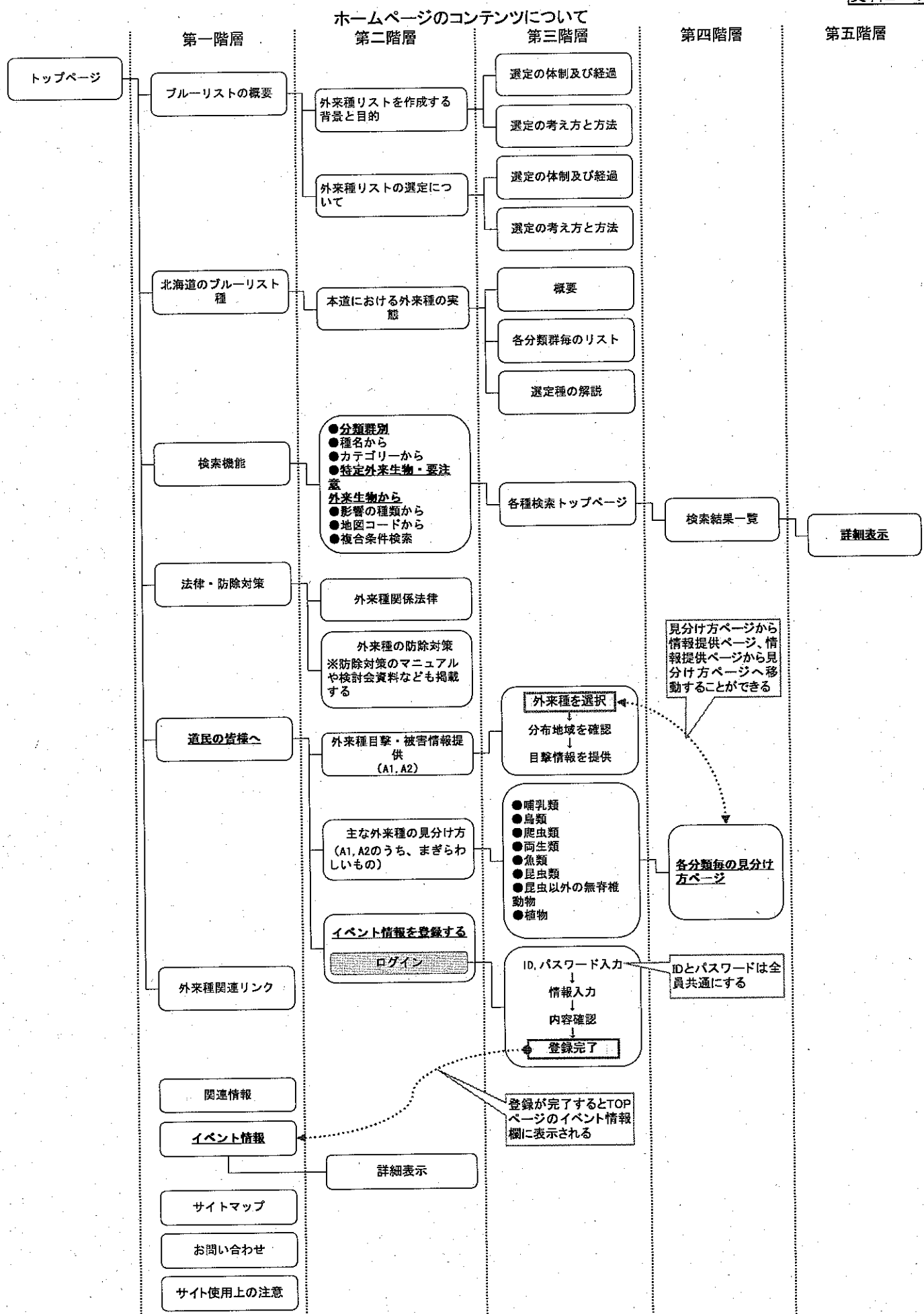
ニホンヒキガエル(アズマヒキガエル)	
学名	無尾目
科	ヒキガエル科
属	ニホンヒキガエル(アズマヒキガエル)
種	<i>Bufo bufo formosus</i>
亜種	A
分布	本州東北、佐渡島
生息地	田舎市谷地、旭川市神居古澤
特徴	夜行性で、繁殖期以外はほとんど水に入らない。
体長	体長は4～16cm、四肢は短く背中に大小のこぶがある。
水棲性	水たまりや池などの止水に産卵する。
生息地	低地から高山まで幅広い環境に生息する。
生態	背中のこぶからは、毒液が分泌される。
生態的役割	☐ 上位捕食者としての影響 ✓ ☐ 捕食者への影響 ☐ 競合・駆逐の可能性 ✓ ☐ 交雑による遺伝的攪乱 ☐ 在来生物への病気・寄生虫の媒介 ☐ 農林水産業などへの影響 ☐ 人の健康への影響
繁殖	☐ 有リ/口無し ☐ 有リ/口無し
備考	函館市谷地周辺の個体群は古くから確認されており、エゾヒキガエルと分類されたこともあったが、旭川市神居古澤の個体群は1990年代に確認されたものである。
参考文献	1) 斎藤和昭(2002) 北海道に持ち込まれたカエル類「外来種ハンドブック」(日本生態学会) p.232 地人書館 2) 岡田一雄(1936) 日本産無尾類図説 3) 松井 正文(1989) 日本カエル図鑑 文一総合出版

2009BL(改良後)

ニホンヒキガエル(アズマヒキガエル)	
学名	無尾目
科	ヒキガエル科
属	ニホンヒキガエル(アズマヒキガエル)
種	<i>Bufo bufo formosus</i>
亜種	A3
分布	本州東北、佐渡島
生息地	田舎市谷地、旭川市神居古澤
特徴	夜行性で、繁殖期以外はほとんど水に入らない。
体長	体長は4～16cm、四肢は短く背中に大小のこぶがある。
水棲性	水たまりや池、庭、水田などの止水に産卵する。2月～7月に繁殖する。1つの産卵地では1週間の間に一度に繁殖が行われ、そのおびただしい数のヒキガエルの様子から「蛙合戦」と言われる。ひと秋の繁殖を2回、1回の産卵数は1500～8000個、卵は約1週間後孵化。幼生期間は約1～3か月。
生態	背中のこぶからは、毒液が分泌される。
生態的役割	☐ 上位捕食者としての影響 ✓ ☐ 捕食者への影響 ☐ 競合・駆逐の可能性 ✓ ☐ 交雑による遺伝的攪乱 ☐ 在来生物への病気・寄生虫の媒介 ☐ 農林水産業などへの影響 ☐ 人の健康への影響
繁殖	☐ 有リ/口無し ☐ 有リ/口無し
備考	1) 斎藤和昭(2002) 北海道に持ち込まれたカエル類「外来種ハンドブック」(日本生態学会) p.232 地人書館 2) 岡田一雄(1936) 日本産無尾類図説 3) 松井 正文(1989) 日本カエル図鑑 文一総合出版 4) 斎藤和昭(2002) 北海道に持ち込まれたカエル類「外来種ハンドブック」(日本生態学会) p.232 地人書館 5) 松井 正文(2007) スライネー(1807)に提議された日本とその周辺地域無尾両生類を再考、日本爬虫両生類学会誌2007-2 pp.184-192 6) 財団法人自然環境研究センター(2008) 平成19年度 カエルツボカビ実態把握調査結果報告書 7) 宇佐美有美(2009) 両生類のウイルス感染症 モンテニア2009第7号 pp.189-197 東洋化学株式会社 8) 生物多様性調査動物分布調査報告書(第3回・両生類調査) p.51, 57, 69, 73, 100 環境省自然環境局・生物多様性センター 9) 斎藤和昭(2004) 北海道に生息するカエル類「モリ」 No.11 pp.69-65 北海道新聞社 10) 斎藤和昭他(1994) 北海道におけるアズマヒキガエル <i>Bufo japonicus formosus</i> の新分布地 旭川市博物館研究報告2 pp.21-23 11) 阿川水辺の自然調査(河川環境データベース) H10-H15年度 国土交通省・H11 H15年度版 12) 2007年本州(北海道)に生息するアズマヒキガエル・旭川市神居古澤市で確認されたアズマヒキガエル 旭川市博物館研究報告2 pp.21-23 13) 2008年アズマヒキガエル? 確認 北海道新聞2008年7月10日 14) 2008年産卵・繁殖の状況 北海道新聞2008年5月27日 15) 2008年産卵の状況・ヒキガエル更にかえる 北海道新聞2008年5月27日 夕刊(地方) 16) 2007年産卵・繁殖の状況「ジャンボカエル」出現 北海道新聞2007年8月11日 Web版 17) 松井正文(1989) ヒキガエル「日本動物大百科5両生類・爬虫類・軟体動物」(千石正一ほか編) p.29-31 平凡社 18) 門崎北雄(1981) 野幌丘陵とその周辺の自然と歴史 北海道開拓記念研究報告4 p.25-38

新規追加項目

改訂前、改訂後のリストデータ入力表例



北海道BL業務協力者候補名簿(委員以外の研究者・専門家など)

No	氏名	所属1	分類	備考
1	吉田剛司	酪農学園大学 准教授	全般・両生・は虫類	写真協力
2	小川 巖	エコネットワーク 代表	全般	書籍の購入
3	赤坂 宗光	国立環境研究所環境リスク研究センター	全般・両生・は虫類	写真協力、情報提供
4	五十嵐博	(有)ムーブ植物設計代表	植物	植物データ提供
5	安細元啓	(株)野生総合研究所代表取締役	昆虫	情報・写真提供
6	金子正美	酪農学園大学環境システム学部教授	情報処理	情報処理アドバンス
7	有賀望	札幌市豊平川さけ科学館	魚類	外来種データ、文献提供
8	岡本康寿	札幌市豊平川さけ科学館	魚類	写真協力
9	岩崎曉生	北海道立中央農業試験場	昆虫	農業害虫における外来種データ、文献、写真提供
10	原秀穂	北海道立林業試験場	昆虫	林業害虫における外来種データ、文献、写真提供
11	伊東拓也	北海道立衛生研究所	昆虫	衛生・不快害虫における外来種データ、文献、写真提供
12	島田順一	北海道ウォッチングセンター	全般	情報提供
13	齋藤和範	ザリガニ探偵団主宰	ザリガニ・メダカ	情報提供
14	大坪晃輔	酪農学園大学 博士課程	ペット	研究論文
15	宇根有美	麻布大学獣医学科病理学研究室 准教授	両生類の疾病	情報提供
16	本田直也	札幌市円山動物園	爬虫類	写真撮影協力
17	酒井裕司	札幌市円山動物園 園長	爬虫類	写真撮影協力
18	山本秀明	札幌市円山動物園	爬虫類	写真撮影協力
19	池田亨嘉	帯広百年記念館	爬虫類	各種情報提供

新規掲載や掲載削除等を検討する主な候補種(11月段階)

<新規掲載を検討する主な候補種>

分類	種名(候補ランク)	理由	道内分布	備考
哺乳類	無し			
鳥類	コクチョウ(h)	新たな観察事例が報告されたこと。 新たな観察報告(文献)が公開されたこと。	知床岬周辺で2004年より目撃あり	
爬虫類	フニガメ(G)	ペット導入の可能性 他の小動物の捕食 在来種に対する捕食による駆逐とヒトへの咬傷の可能性。	三笠市で捕獲されている	要注意外来生物
	チュウゴクスッポン(チュウゴクスッポン)(E)	ペット導入の可能性・他の小動物の捕食 分類上、ニホンスッポンとチュウゴクスッポンは同一種(別亜種)のため、チュウゴクスッポン(チュウゴクスッポン、ニホンスッポン)と統合の上、再掲		要注意外来生物
	トゲスッポン(h)	ペット導入の可能性 他の小動物の捕食		要注意外来生物
	アムールカナヘビ(l)	他の小動物の捕食・ニホンカナヘビやニホントカゲ、コモチカナヘビと競合・ロシアにも生息し寒冷に適應するうえ、日本国内でも対馬に生息するため、検疫なしでの移動が可能のためマークした		
	タカチホヘビ(h)	土砂資材や植木などの土と一緒に運びこまれる恐れ ペット導入の可能性 他の小動物の捕食		
両生類	チョウセンヤマアカガエル(l)	エゾアカガエルとの競合 ツボカビやラナウイルス伝播の危険性 ロシアにも生息し寒冷に適應するうえ、日本国内でも対馬に生息するため、検疫なしでの移動が可能のためマークした		
	ブレーンズヒキガエル(h)	他の小動物の捕食・在来カエルとの競合 ツボカビやラナウイルス伝播の危険性		特定外来生物
	ヨーロッパミドリヒキガエル(h)	同上		要注意外来生物
	ヒダサンショウウオ(h)	Hynobius属のサンショウウオ4種として再掲 東日本産で寒冷地に適應可能		
	ハクバサンショウウオ(h)	同上		
魚類	シルバーアロワナ(H)	捕獲例あり(斃死体) ペットとして導入されたいが、生体時に野外に放逸されたか不明のため、このカテゴリに仮定	南幌町南幌温泉沼で捕獲例あり	
	アジアアロワナ(H)	捕獲例あり(斃死体) ペットとして導入されたいが、生体時に野外に放逸されたか不明のため、このカテゴリに仮定	南幌町南幌温泉沼、札幌市茨戸川で捕獲例あり	
	アリゲーター・ガー(D)	生体の捕獲例あり。 在来種に対する捕食による駆逐とヒトへの咬傷の可能性。	石狩川滝川付近で生体捕獲例あり	
昆虫	アカボシゴマダラ(D)	在来種との競合、駆逐、捕食	札幌市内で成虫確認	
	スグリコスカシバ(C)	農業被害	余市町、長沼町	
	オリーブアナアキゾウムシ(A)	農業被害 近縁種で導入が確認されたものは、いずれも被害が継続する傾向にあるため、このカテゴリと仮定	千歳市	
無脊椎	ミステリークレイフィッシュ(C)	単為生殖可能 他のザリガニと同様に道内のペットショップに流通する。 新たな観察事例が報告された。		
	シナヌマエビ(C)	在来種のスジエビとの競合 新たな観察報告(文献)が公開された。		
	ヌマエビ(C)(国内)	在来種のスジエビとの競合 新たな観察報告(文献)が公開された。		
植物	国外種追加 93種	整理中		
	国内種追加 5種	整理中		

<掲載削除等を検討する主な候補種>

分類	種名(候補ランク)	理由	道内分布	備考
哺乳類	無し			
鳥類	無し			
爬虫類	ニホンスッポン	分類的にチュウゴクスッポンと統合して再掲		要注意外来生物
両生類	トウホクサンショウウオ	Hynobius属のサンショウウオ4種として再掲		
	クロサンショウウオ	Hynobius属のサンショウウオ4種として再掲		
	ナゴヤダルマガエル	分布的に当亜種を削除(トウキョウダルマガエルは残る)		
魚類	オオクチバス	撲滅宣言されたのでカテゴリー区分変更予定。生態系への影響は報告されているので掲載予定。	南幌公園沼が最後	特定外来生物
昆虫	無し			
無脊椎	無し			
植物	在来種に戻す 29種	整理中		
	一時帰化、消滅種 27種	整理中		

新規掲載種、掲載削除種についての基本的な考え方について

○新規掲載種、掲載削除種について

野外で生息・生育が確認されている（確認された）ものや野外での生息・生育は確認されていないものの販売が確認されているペットなどについて、次の2つの選定の視点(案)を基本に、部会毎に新規掲載種、掲載削除種を整理し、検討委員会に報告する。

— 選定の視点(案) —

①対象種の絞り込み

野外で過去に確認されているものの確認が1匹かつ1回など記録が少なく、現在、確認されていないものについては、できるだけ「定着していない」ものとして取り扱い、②の場合を除き、新規掲載を行わない。

(掲載されているものは、削除する。)

②リスク管理

「特定外来生物」、「要注意外来生物」、「未判定外来生物」、「日本の侵略的外来種ワースト100」、「世界の侵略的外来種ワースト100」、検討委員会部会で生態系への影響の恐れなどから検討することが必要と認めた種については、リスク管理のためカテゴリー区分の当てはめを行い掲載を判定する。

掲載種のカテゴリー区分についての基本的な考え方について

○カテゴリー区分及び個別の種のカテゴリー見直しについて（案）

今回の改訂で新たな情報が追加されるとともに、生態系への影響などの具体的な情報が記載されることから、次のとおり個別の種のカテゴリー区分について、再度、判定を行い、見直しを行う。

（１）カテゴリー区分は、北海道外来種リスト（北海道ブルーリスト 2004）の考え方（資料4-1の P7）を踏襲する。

（２）カテゴリー A の細区分は、昨年度までの当検討委員会での検討結果を踏まえ、次のとおりとする。（資料4-2）

①カテゴリー区分の細分化 A1～A3 の考え方

平成17～19年度に当検討委員会で外来種による影響を踏まえた対策の優先度の観点から A1～A3 考え方を整理しており、今回の改訂においても同区分に基づき区分することとしたい。

② A2 から A1 への移行プロセス

平成20年度の当検討委員会で A2 から A1 への移行プロセスを説明しており、同プロセスにより移行の有無を検討することとしたい。

（３）個別の種のカテゴリー区分及びカテゴリー区分 A の細区分の検討は、部会毎に実施し、検討委員会に報告する。

北海道の外来種リスト

ー 北海道ブルーリスト 2004 ー

平成16年3月

北海道

1 外来種リストを作成する背景と目的

近年、野生生物が本来の移動能力を超えて、国外又は国内の他地域から人為によって意図的・非意図的に導入された種が地域固有の生物相や生態系にとって大きな脅威となっている問題、いわゆる「外来種問題」がクローズアップされている。

地球上に存在する生物は約3000万種ともいわれているが、私たち人類の生存は、この生物多様性の上に成り立っているものであり、外来種によって地域固有の生物多様性が損なわれることは、人類の生存基盤が脅かされるということである。そして現在、外来種によって様々な影響が生じているのである。

このため、世界的にも外来種への対策は急務とされており、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）において採択された「生物の多様性に関する条約」（2002年3月現在の締約国数：183カ国）では、締約国は、「生態系、生息地若しくは種を脅かす外来種の導入を防止し又はそのような外来種を制御し若しくは撲滅すること」と定められている。

我が国でも、ハブ等の天敵として導入されたジャワマングースによるアマミノクロウサギなどの捕食（奄美大島）や、野生化したタイワンザルとニホンザルとの交雑（和歌山県）などの外来種による種々の問題を踏まえ、2002年3月に地球環境保全に関する関係閣僚会議で決定された「新・生物多様性国家戦略」において、外来種問題が生物多様性の危機の一つとして掲げられた。そして2003年1月に「移入種対策に関する措置の在り方について」が中央環境審議会に諮問され、同年12月に答申されたところであり、現在、新たな法整備に向けた作業が進められている。

本道においては、ペットとして飼われ捨てられたアライグマが道央圏を中心に生息域を拡大しており、アオサギのコロニーを消滅させたり、農作物等の被害をもたらしている。近年、国内希少野生動植物種であるシマフクロウの生息地への出没も新たに確認され、生態系への影響が強く懸念されている。また、釣りの対象として人気のあるブラックバスが放流され、道南の湖沼や道央のダム湖などで発見されたり、植物でも、ブタクサが花粉症の原因植物とされているなど、外来種は本道でも大きな問題となっている。

このようなことから、「北海道の外来種リスト」（北海道ブルーリスト2004）を作成し、種毎に導入された経緯や生態学的特性、その影響などを取りまとめ、本道における外来種の実態を把握し、対策の基礎資料とすることとした。

なお、これまで「外来種」と「移入種」という用語が同様の意味で使用されていたが、今後は、国の方針に準じ、「外来種」を用いることとした。

ブルーリストとは

希少野生生物のリストが「レッドリスト」とされていることを踏まえて、ブルー（青色）とレッド（赤色）を対照的に捉え、外来種のリストを「ブルーリスト」と命名した。

2 外来種リストの選定について

(1) 選定の体制及び経過

ア 検討体制

北海道ブルーリストの作成にあたっては、2002年10月に「北海道移入種検討委員会」を設置するとともに、各分類群ごとに専門部会を設け、2003年度にかけて（約1年半）検討を行った。

同委員会及び各専門部会の構成メンバーは次のとおりである。

<北海道移入種検討委員会：委員（学識経験者）>

（50音順・敬称略）

氏 名	所属など（検討当時）	担 当	備 考
阿 部 永	元北海道大学教授	哺乳類	座長
五十嵐 博	北海道野生植物研究所所長	植物	
池 田 透	北海道大学大学院文学研究科助教授	哺乳類	
帰 山 雅 秀	北海道東海大学大学院理工学研究科教授	魚類	
久万田 敏 夫	元北海道大学教授	昆虫	
佐々木 均	酪農学園大学短期大学部教授	昆虫	2003.4～
中 林 成 広	北海道両棲爬虫類研究所所長	両生・爬虫類	
藤 巻 裕 蔵	帯広畜産大学名誉教授	鳥類	
吉 澤 和 徳	北海道大学大学院農学研究科助手	昆虫	

<北海道移入種検討委員会：庁内委員（道の研究職員等）>

（50音順・敬称略）

氏 名	所属など（検討当時）	担 当
青 山 智 哉	水産孵化場 資源管理部資源管理科研究職員	魚類
梅 木 賢 俊	環境科学研究センター 自然環境部主任研究員	鳥類
越 智 弘 明	道南農業試験場 研究部主任研究員	植物
川 井 唯 史	原子力環境センター 水産研究科研究職員	甲殻類
車 田 利 夫	環境科学研究センター 自然環境部自然環境保全科研究職員	哺乳類
桑 原 康 裕	網走水産試験場 資源増殖部栽培技術科長	軟体動物
古 原 洋	中央農業試験場 企画情報室研究職員	植物
高 田 雅 之	環境科学研究センター 企画総務部環境GIS科長	情報処理
内 藤 一 明	水産孵化場 養殖技術部育種遺伝科長	魚類
堀 繁 久	開拓記念館 学芸員	昆虫
宮 木 雅 美	環境科学研究センター 自然環境部主任研究員兼植物環境科長	植物

イ 協力体制

北海道ブルーリストの検討・作成にあたっては、前段の各委員に加えて、次の専門家の御協力をいただいた。

<御協力いただいた方々>

(50音順・敬称略)

氏 名	所属など(検討当時)	担 当
岩 崎 暁 生	北海道病害虫防除所 予察課長	昆虫
浦 和 茂 彦	独立行政法人さけ・ます資源管理センター 研究調査課 遺伝資源研究室長	魚類
澤 田 嘉 昭	北海道畜産試験場 環境草地部 主任研究員	植物
鳥 倉 英 徳	北海道中央農業試験場 クリーン農業部長 (兼) 北海道病害虫防除所長	昆虫
原 秀 穂	北海道林業試験場 森林保護部病虫科長	昆虫
松 田 まゆみ	日本蜘蛛学会評議員	蜘蛛

ウ 検討の経過

北海道ブルーリストの検討・作成にあたっては、2002年度に設置した「北海道移入種検討委員会」において、検討に関する基本的事項等が整理された。

さらに、各分類群ごとに専門部会を設け、2002年度にリストアップを行い、2003年度に種毎のデータ等の整理が行われた。

区 分	分 掌	2002年度	2003年度
北海道移入種検討委員会	全体(基本的事項等)	2002.10.24(第1回)	2004. 3.26(第2回)
各 専 門 部 会	哺乳類専門部会	哺乳類 2002.12.18(第1回) 2003. 3.26(第2回)	2003. 8.29(第3回) 2004. 2.16(第4回)
	鳥類専門部会	鳥類 2002.12.11(第1回) 2003. 3.17(第2回)	2003. 8.19(第3回) 2004. 2. 2(第4回)
	両生・爬虫類専門部会	両生類・爬虫類 2002.12.12(第1回) 2003. 3.27(第2回)	2003. 8.21(第3回) 2004. 2.17(第4回)
	魚類専門部会	魚類・甲殻類・軟体動物 (魚類以外は2003年度～)	2002.11.25(第1回) 2003. 3. 4(第2回) 2003. 8.27(第3回) 2004. 2.20(第4回)
	昆虫専門部会	昆虫 2002.11.27(第1回) 2003. 3.20(第2回)	2003. 8.14(第3回) 2003.11. 7(第4回) 2004. 2.12(第5回)
	植物専門部会	植物 2002.12.13(第1回) 2003. 2.28(第2回)	2003. 8.22(第3回) 2004. 2.18(第4回)

(2) 選定の考え方と方法

北海道は、気候的には温帯から亜寒帯への移行帯に属し、周囲は豊かな海に囲まれており、その生物相は、本州以南とは異なる自然性豊かな北方らしい特徴を示している。

このようなことから、北海道ブルーリストに掲載（選定）する種については、次に掲げる4つの視点から検討を行った。

<4つの視点>

- ① 本道に導入されているか。
- ② 本道に定着できるか。(越冬の可能性など)
- ③ 本道に定着しているか。
- ④ 本道への影響等が報告されている、あるいは懸念されるか。

上記視点による種の選定のためのふり分けを、次表のとおりとし、同表中の「カテゴリー区分」のA、B、C、D、E、h及びKを選定することとした。

なお、「導入」とは、野生生物の本来の移動能力を超えて、人為によって意図的・非意図的に移動した（された）ことを指し、「導入の時期」については、貿易や物流がそれまでに比べ飛躍的に増大したのは明治時代以降であることなどの背景を踏まえ、原則として明治時代以降に本道に導入された生物種を外来種と捉えることとした。

ただし、動物は、実験・動物園利用など封じ込め下での導入を除くこととし、ペット販売など、不特定多数の者が入手できるような形態は「導入」とした。なお、ペットショップ等で販売されている種については、本リスト作成時に実施した札幌市内でのペットショップへの立入調査等において販売が確認された種を検討の対象とすることとした。

また、植物は、農地・林地・園地や家庭菜園、花壇・宅地の庭などで栽培するための導入は除くこととした。

「影響」については、次に掲げる7つの項目を例として示す。

- ① 上位捕食者としての影響
- ② 植生などへの影響
- ③ 競合・駆逐の可能性
- ④ 交雑による遺伝的攪乱
- ⑤ 在来生物への病気・寄生虫の媒介
- ⑥ 農林水産業などへの影響
- ⑦ 人の健康への影響

表 対象生物の選定の考え方

視点①	視点②	視点③	視点④	カテゴリー 区 分
本道に導入(※1)されているか ○：導入されている △：不明またははっきりしない ×：導入されていない	本道に定着できるか (越冬の可能性など) ○：定着できる (またはそのおそれがある) ×：定着できない	本道に定着しているか ○：定着している △：不明またははっきりしない ×：定着していない	本道への影響(※2)は ○：影響等が報告されている あるいは懸念されている △：上記以外	
○	○	○	○	A
		△	△	B
		×	○	C
		×	△	D
		×	×	E
		×	△	F
△・×	○	×	×	G
		○(※3)	○	H
		△	△	
		×	○	
		×	△	
	×	△	I	
(昆虫のみ) 導入されている 「室内昆虫」である(※5)				J
				K

(※1)「導入」とは

野生生物本来の移動能力を超えて、人為によって意図的・非意図的に移動した(された)ことを指し、導入の時期については、原則として明治時代以降に本道に導入された生物種を外来種として捉える。

(※2)「影響」の例

- ・上位捕食者としての影響
- ・植生などへの影響
- ・競合、駆逐の可能性
- ・交雑による遺伝的攪乱
- ・在来生物への病気、寄生虫の媒介
- ・農林水産業などへの影響
- ・人の健康への影響

(※3)

この欄は、在来種である可能性があることにより、視点①を「△」とした場合に適用する。

(※4)「注意種」とは

導入される可能性が高く、導入されると定着し影響が懸念される等、特に注意が必要と考えられるもの

(※5)

貯穀害虫などはA～Eなどに区分しにくいいため、「室内害虫」としカテゴリー区分を「K」とする。

3 本道における外来種リスト（選定結果）

（１）概要

北海道ブルーリストの作成にあたり、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類（淡水魚、汽水魚、通し回遊魚）、昆虫、昆虫以外の無脊椎動物及び植物の各分類群毎に検討した結果、全部で８０６種の生物が選定された。

分類群毎に見ると、哺乳類が２５種、鳥類が８種、爬虫類が７種、両生類が１６種、魚類が３５種、昆虫が８９種、昆虫以外の無脊椎動物が２８種、植物が５９８種となっている。

原産地を国外・国内別に見ると、国外が６３３種、国内が１０１種、不明が７２種となっており、国外から導入されたものが８割近くを占めている。なお、原産地（鳥類の場合は繁殖地）が国外である場合は「国外外来種」、国内である場合は「国内外来種」、国外と国内にまたがる場合は「国内外来種」、不明の場合は「不明」と区分した。

カテゴリー区分別に見ると、Ａが５０４種、Ｂが１８３種、Ｃが３７種、Ｄが１０種、Ｅが２１種、ｈが３０種、Ｋが２１種となっており、Ａが最も多くなっている。

なお、外来種の生息実態については不明な部分も多いため、新たな知見の収集・調査に努めるなどして、今後とも随時リスト（種の解説の記載内容を含む）の見直し等を図ることとする。

<北海道ブルーリストに選定された生物数一覧>

分 類 群	種 数	内 訳									
		原産地の区分			カテゴリー区分						
		国外	国内	不明	A	B	C	D	E	h	K
哺 乳 類	25	18	7	-	12	1	1	1	7	3	
鳥 類	8	4	4	-	4	-	4	-	-	-	
爬 虫 類	7	2	5	-	1	-	3	-	-	3	
両 生 類	16	1	15	-	5	-	-	-	-	11	
魚 類	35	23	12	-	14	9	3	7	1	1	
昆 虫	89	40	25	24	43	2	16	-	2	5	21
昆虫以外の無脊椎動物	28	26	2	-	17	-	4	-	1	6	
植 物	598	519	31	48	408	171	6	2	10	1	
合 計	806	633	101	72	504	183	37	10	21	30	21

カテゴリー区分「A」の細区分（案）について

- 1 趣旨、2 「A」区分の細区分の考え方については平成17年度～19年度までの検討委員会での検討結果（上記をもとに平成19年度に細区分した結果は、別紙のとおり）
○3 A2からA1への移行プロセスについては、平成20年度の検討委員会で説明

1 趣旨

北海道ブルーリストにリストアップされた806種（*変更予定）のうち、504種（*変更予定）が最も生態系等への影響が懸念されるカテゴリー「A」に区分されたことから、その影響の程度により3段階に細区分することで、対策の必要な種を明確化でき、北海道における対策の推進に資することができる。

○監視は、全てのランク（A1～K）の種において必要とする

監視とは・・・生息（生育）実態を把握すること

○防除は、A1ランクの種において実施する

防除とは・・・定着または拡散を防止するため、捕獲（除去）を行い適正に処分を行うこと

「A1」：緊急に防除対策が必要な外来種

「A2」：本道の生態系等へ大きな影響を及ぼしており、防除対策の必要性について検討する外来種

「A3」：本道に定着しており、生態系等への影響が報告または懸念されている外来種

○植物については、原植生が比較的明確でその学術的価値が高く、保護が優先されるべき地域内においては、A2及びA3ランクの植物についてもA1とみなし、防除対策を推進する

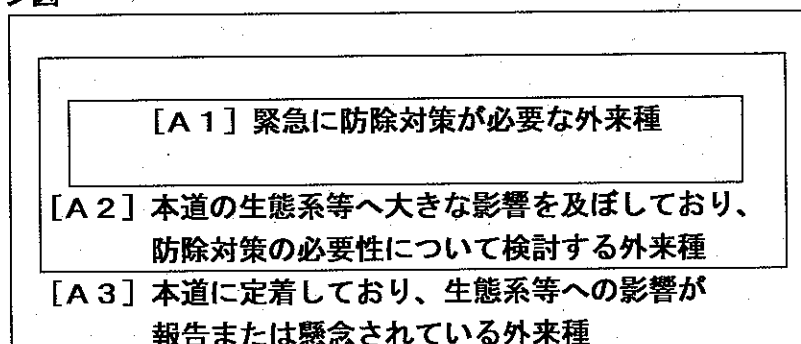
*保護が優先されるべき地域

・原生自然環境保全地域

・国立、国定公園特別保護地区

（国立・国定公園の特別保護地区以外の地域や道立自然公園、天然記念物等においても引き続き外来種の情報収集に努め、その状況に基づき必要に応じて地域を追加する。）

○細区分イメージ図



2 「A」区分の細区分の考え方

A1、A2の選定については、次の項目を考慮して選定することとする。

- ・検討委員又は庁内委員から選出のあったもの
- ・ブルーリストのデータによる影響の大きな外来種（生態系への影響3項目以上ある種、人の健康への影響がある種、農林水産業への影響がある種）
- ・外来生物法により特定外来生物又は要注意外来生物に指定されているもの
- ・「世界の侵略的外来種ワースト100」に選定されているもの
- ・「日本の侵略的外来種ワースト100」に選定されているもの

3 A2からA1への移行プロセス

A1に移行する際の評価手法としては、種の生息状況の把握、現行の法制度等による規制、資源としての利用実態、生態系への影響などの情報を収集し、当該種が生態系に与える影響が大きいため、運搬・飼養・栽培などに制限があること、本道に一定数生息し駆除の必要があることなどを総合的に勘案した上で、A1ランクとして選定する。

カテゴリーA1～A3リスト(平成19年度選定)

区分	分類	種名	理由	道内分布	外来生物法 ※1	世界 ワースト100 ※2	日本 ワースト100 ※3	備考
A1	哺乳類	アライグマ	在来種(エゾタヌキ)との競合、駆逐、農業等被害、人への健康被害	道内120市町村	特定		○	
	哺乳類	ミンク	在来種との競合、駆逐、農業等被害、(アライグマと併せた対策を実施)	道内全域	特定			
	魚類	ブラウントラウト	在来種(在来魚)との競合、駆逐、捕食	日高、石狩、渡島他	要注意	○	○	
	魚類	ブルーギル	在来種との競合、駆逐、捕食	函館	特定		○	
	昆虫	セイウオオマルハナバチ	在来種との競合、駆逐、交雑、寄生虫媒介	道内90市町村	特定		○	
	無脊椎類	ウチダザリガニ	在来種(ニホンザリガニ)の捕食、生態的競争排除	洞爺湖、然別湖地	特定		○	
A2	哺乳類	ニホンイタチ	在来種との競合、駆逐、捕食	道内全域			○	
	哺乳類	テン	在来種との競合、駆逐、捕食	道内全域				
	鳥類	アイガモ	在来種(マガモ)との交雑	道内の水田				
	爬虫類	アカミミガメ(ミシシippアカミミガメ)	在来種との競合、駆逐、捕食	札幌、帯広	要注意	○	○	
	両生類	ウシガエル	在来種との競合、駆逐、捕食	道南	特定	○	○	
	魚類	ニジマス	在来種(在来魚)との競合、駆逐	道内ほぼ全域	要注意	○	○	
	昆虫	カブトムシ	在来種との競合、駆逐	道内全域				
	無脊椎類	チャコウラナメクジ	在来種との競合、駆逐、農業被害、害生虫媒介、公衆衛生	道南、道央			○	
	無脊椎類	サカマキガイ	在来種との競合、駆逐、農業被害、害生虫媒介、公衆衛生	道南、道央			○	
	植物	オオハシゴソウ	在来植物との競合、駆逐、地下茎により繁殖し大群落を形成	道内全域	特定			
	植物	オオアワダチソウ	在来植物との競合、駆逐	道内全域	要注意		○	
	植物	アメリカオニアザミ	在来植物との競合、駆逐、重要雑草、鋭い刺を持ち家畜にも被害	道内全域	要注意			
	植物	セイヨウトゲアザミ	在来植物との競合、駆逐、重要雑草、放牧草地で最強害	道内全域				
	植物	セイヨウタンポポ	在来植物との競合、駆逐、重要雑草	道内全域	要注意			
	植物	ヘラオオバコ	在来植物との競合、駆逐	道内全域(道東少)	要注意			
	植物	ブタナ	在来植物との競合、駆逐、重要雑草	道内全域(道東少)	要注意			
	植物	コウリンタンポポ	在来植物との競合、駆逐	道内全域				
A3	植物	ムラサキツメクサ	在来植物との競合、駆逐	道内全域				
	植物	シロツメクサ	在来植物との競合、駆逐	道内全域				
	植物	フランスギク	在来植物との競合、駆逐	道内全域				
	植物	ブタクサ	在来植物との競合、駆逐、重要雑草、花粉症の原因	道内全域				
	植物	イワミツバ	在来植物との競合、駆逐	道内各地に点在	要注意			
	植物	ハリエンジュ	在来植物との競合、駆逐、環境攪乱	道内全域	要注意		○	
	上記以外の475種							

※植物については、原植生が比較的明確でその学術的価値が高く、保護が優先されるべき地域内(原生自然環境保全地域、国立・国定公園特別保護地区など)においては、A2及びA3ランクの植物についてもA1とみなし防除対策を推進する

- ※1 外来生物法 「特定」→特定外来生物
「要注意」→要注意外来生物
- ※2 世界の侵略的外来種ワースト100
- ※3 日本の侵略的外来種ワースト100

改訂の進め方等について(案)

○年度内に改訂するため概ね次のスケジュール及び内容で進めさせていただきたい。

時期	内 容		
1月 中旬 まで	植 物 以 外	2月 上旬 まで	植 物
	○新規種、削除種、カテゴリー区分変更 候補種の個表及び一覧表作成 ◎上記への助言等の協力 ◎新規候補種があれば、受託者に資料等提供		○同左 ◎同左 ◎同左
1月 中旬 ～ 2月 下旬	◎各専門部会の開催 新規、削除、カテゴリー区 分、細区分のあてはめ検討 *見直しの少ない専門部会は、 意見照会等で開催に代える。	2月 中旬 ～ 2月 下旬	◎同左
2月 下旬 ～ 3月 中旬	◎第2回外来種対策検討委員会開催 → ①事務局より部会の検討結果報告・承認 (事前に委員に送付) ②背景と目的など前文の検討 (事前に委員に意見照会)		
2月 下旬	○URLによる委員へのデータベース開示(～3月中旬) ◎掲載種の情報等に加筆・修正があれば受託者に助言(～3月中旬)		
3月 末 まで	○必要に応じ加筆修正、業務完了		
4月	公表		

○は、受託者が行う。

◎は、検討委員、庁内委員に御協力いただく。

北海道外来種対策検討委員会設置要綱

(目 的)

第1条 国外及び国内の他地域から人為によって意図的・非意図的に導入されることにより、その自然分布域を越えて存在することとなる生物（以下「外来種」という。）による本道の生態系、人の生命・身体又は農林水産業への被害を防止するため、必要な対策を検討することを目的に「北海道外来種対策検討委員会」（以下「検討委員会」という。）を設置する。

(検討事項)

第2条 検討委員会は、次に掲げる事項について検討する。

- (1) 外来種の生息・生育状況の調査把握に関すること
- (2) 外来種対策に関すること
- (3) その他必要な事項

(構成及び委員等)

第3条 検討委員会は、9名以内の委員で構成する。

- 2 委員は、外来種に関する学識を有する者等から、知事が委嘱する。
- 3 委員の委嘱期間は、委嘱の日から委嘱した日の翌年度の3月31日までとする。

(運営)

第4条 検討委員会は、必要に応じ環境生活部長が召集する。

- 2 検討委員会は、環境生活部長の指名により座長を置く。
- 3 検討委員会は、座長が主宰する。
- 4 座長は、検討委員会の運営上必要があるときは、庁内の研究員等委員以外の者を出席させて、その意見を求めることができる。
- 5 環境生活部長は、専門事項を検討するため、検討委員会に専門部会を設置することができる。
- 6 専門部会は、必要に応じ環境生活部長が召集する。
- 7 専門部会は、環境生活部長の指名により座長を置き、座長が主宰する。
- 8 委員会及び専門部会の開催は、委員の半数以上の出席をもって成立するものとする。

(謝金及び旅費)

第5条 委員が検討委員会または専門部会に出席したときは、別に定めるところにより、謝金及び旅費を支給する。

(庶務)

第6条 検討委員会及び専門部会の庶務は、環境生活部環境局自然環境課において処理する。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、検討委員会及び専門部会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- この要綱は平成17年 2月21日から施行する。
この要綱は平成18年 6月26日から施行する。
この要綱は平成18年12月20日から施行する。

北海道外来種対策検討委員会委員名簿

氏 名	専門分野	所 属
阿部 永	哺乳類	元北海道大学農学部 教授
池田 透	哺乳類	北海道大学大学院文学研究科 教授
藤巻 裕蔵	鳥類	帯広畜産大学 名誉教授
中林 成広	爬虫類・両生類	北海道両生爬虫類研究所 所長
帰山 雅秀	魚類	北海道大学大学院水産科学研究院 教授
中田 和義	昆虫以外の無脊椎動物	独立行政法人土木研究所水環境研究グループ
久万田 敏夫	昆虫類	元北海道大学農学部 教授
高橋 英樹	植物	北海道大学総合博物館 教授
高田 雅之	情報処理	環境科学研究センター環境科学部主任研究員

北海道外来種検討委員会庁内委員名簿

氏 名	専門分野	所 属
車田 利夫	哺乳類	環境科学研究センター 自然環境部 道東地区野生生物室長
玉田 克巳	鳥類	環境科学研究センター 自然環境部 自然環境保全科長
内藤 一明	魚類	水産孵化場 養殖病理部 養殖技術科長
栗原 康裕	魚類（軟体動物）	網走水産試験場 調査研究部 栽培技術科長
川井 唯史	魚類（甲殻類）	稚内水産試験場 資源増殖部 資源増殖科長
堀 繁久	昆虫類	開拓記念館 学芸部 資料情報課長
西川 洋子	植物（全般）	環境科学研究センター 自然環境部 植物環境科長
古原 洋	植物（水田）	中央農業試験場 技術普及部 主査（地域支援）
小野 理	情報処理	環境科学研究センター 環境科学部 環境GIS科長